

特 219

284

# 知る送へ人識知

著 治 徳 村 田

館 文 同



# 始





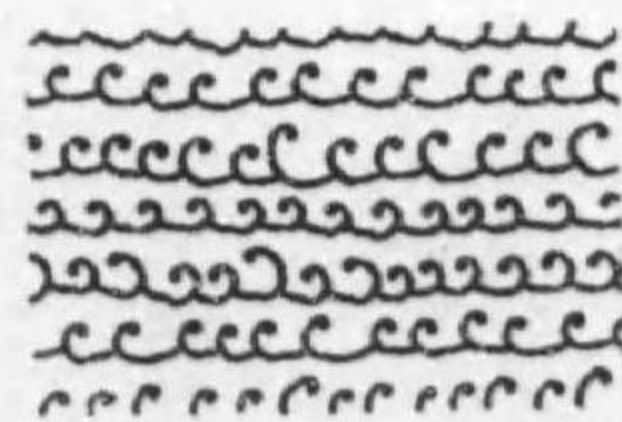
特219  
284



知人識

法學博士

田村德治著



同文館



## 小 序

知識階層は、決して無力ではない。

往々にして人々は考へる、『知識階層に屬する人即ち知識人は、たとひ個人として強力でも、團結力において乏しいから、知識階層それ自體も、亦無力である』と。

いかにも知識人は、知識人たる資格においては、通常團結しない。けれども、

(一) かれらは、知識人たる資格以外の他の資格においては、常に團結する。例へば、かれらが、職業人たる資格において、又は民族人・階級人・乃至國家人たる資格において、常に團結してゐるが如きは、これである。

(二) これらの資格においては、かれらは、決して自らを團結に導くことに怯懦ではない。否、それどころか、かれらは、未だ團結がなければこれを慫慂し、既に團結があれば、これを支持する。

i. 序 小  
(三) のみならず、かれらは、これらの資格において團結する場合に、決して従



屬的地位に立たない。否、それどころか、かれらは、反對に、この團結において、常に指導的地位に立つ。

知識階層の指導は、いかなる時代においても必要である。知識人でなければ、正しい目標を設定し得ないし、又それを實現する方法を正しく案出し得ない。そこでかれらは、いかなる時代においても、重要な役割を有ち、輝しい地位を保つ。過去においてさうであつたし、今日においてもさうであり、將來においては、ますますさうでなければならぬ。

知識階層は、將來、ますます有力と爲るべき運勢にあるに拘らず、往々にしてこれをもつて早晩没落を免れないと考へる人々のあるのは、實に不可思議な現象である。知識階層以外の階層に屬する人々がさう考へるなら、尙別論とせられ得るが、この階層に屬する人々がさう考へるに至つては、沙汰の限りではない。

この一見理解を絶する不可思議な現象は、かれらが、知識人であるに拘らず、誤つた思想を盲信してゐることに由來する。すべて認識は、先入主の影響を受けるこ

とが夥しい。自然界の事物の色が、例へば眼鏡の色の影響を受けるやうに、人生乃至社會に關する事理は、時代を支配した思想に依つて影響せられる。殊にかうした事理は、事物の色と等しく物體的基礎に立つても、これのみに限局せられないから、その認識に弾力性が存し、従つてさう思つて見れば一應さう見られる餘地もあるから、尙更である。先入主と爲つた誤つた思想ほど、恐しいものはない。

知識人は、いかなる時代においても、有能であり、且有力であるから、かれら、即ち知識階層に屬する人々は、時代の情況と必要とに應じて、社會の總體の者の生發達のために努力しなければならない。社會の總體の者の生々發達のために努力することは、人々をして生きがひあらしめるゆゑであるが、人々が生きがひを得るといふことは、絶對の理想であるから、かれらに、殊に有能且有力なかれらに、さうした努力を爲す義務が生ずる。

かくて、かれらは、直接に、自らをして生きがひあらしめ、且他人をして生きがひあらしめるべきであるのみでなく、又間接に、社會をして、否、國家をして、階



級乃至民族をして、かうした努力を爲さしめることに努力すべきである。

そのためには、かれらは、民族問題乃至階級問題のよい解決のために團結することもあらうが、しかし、少くとも今日以後は、むしろ、國家問題のよい解決のために團結すべきである。これは、かれらにとつて必然であるのみでなく、又實に望ましい。

このことは、常時よりは、非常時において特にさうである。けだし、この後の場合においては、社會の情況と必要とが急變するから、目標と方法との發見乃至確立に關して、かれらの力を俟つことは、前の場合におけるよりも、一層大であるからである。

以上の趣旨を、私は、本書に説いた。私は、現下の大時局においては、知識人の奮起は、やがて、必至的であると思ふが、亦それが當然であると思ふ。私は、その奮起を正善の實現の要求に合致せしめたい。けだし、もしそれがこの要求に合致し

ないなら、社會の正常な發達は、徒らに害せられて、人類の生きがひを得ることも著しく遅れるに至るであらうからである。

本書の内容に關して、私は、昭和十四年十月初旬、急遽、執筆の意圖を懷き、月末、既にその八九分の稿が成つたに拘らず、十一月は、雜事に惱殺せられることがあつて、停滯してそれを完了することを得ず、十二月初旬、友人諸氏の激勵を受け、漸く完成した。その後、書肆の好意があつたに拘らず、紙の都合で、印刷に附せられることが甚だ遅れた。今回、書肆の努力に依つて、これを公刊することを得るに至つたことは、私にとつて誠に悦しい。

本書の發兌に關しては、關西大學教授川上敬逸氏及び清水正行氏の厚情を辱うし得た。謹んで兩氏に對して感謝の意を表したい。

昭和十五年三月二十七日

京都にて

著者



目次

小序

まへがき	一
一 社會における諸問題と知識階層	二〇
イ 社會における諸問題と社會問題	二〇
ロ 權力乃至實力と知識階層	二七
二 將來社會における知識階層の優越化	三〇
(一) 社會の變遷と知識階層の地位の重大化	三〇
(二) 精神的勞働者の増加と知識階層の地歩の強化	三九
三 將來社會の特質と社會における諸問題の解決	四六
イ 社會の實質の變遷と知識階層	四六
ロ 問題の實質の變遷と知識階層	五五



四 現在社會の特質と知識階層…………… 四

五 知識階層の役割とその團結…………… 三

六 社會における最大の問題の解決と知識階層の奮起…………… 六

    イ 國家問題の解決と知識階層の團結…………… 六

    ロ 國家問題の解決と正善の實現の要求…………… 六

        (一)知識人の國家人たる資格における團結と知識の國境性…………… 六

        (二)知識の國境性と知識人の正善の實現に對する熱情…………… 六

        (三)正善の實現と知識人の知識人たる資格における團結…………… 六

七 知識階層の任務とその運動…………… 六

    イ 國家問題の解決に關して有つ知識階層の任務…………… 六

        (一)解決を正善の要求に合するやうに導くべき任務…………… 六

        (二)正善の要求に合することを内外に宣明するべき任務…………… 六

    ロ 知識階層の運動と社會の總體の者の生々發達…………… 六

あとがき…………… 一三

まへがき

日本は、目下、曠古の大時局に際會してゐるといふことは、今日、何人も、これを熟知してゐるところである。否、日本のみでなく、現代はまさに世界の變革期であるから、世界の主要の國は、皆、歴史あつて以來の未曾有の大時局に際會してゐる。世界のいづこの國でも、知識階層の人々なら、何人もこれを口にしてゐる。

日本が、もしくは世界が、既に、曠古の大時局に際會してゐるとすれば、そこには、この大時局を打開するために、何か平素の場合と異なる大現象が發現することは、けだし、不可避的であらう。大規模な戦争とか、國家間の合縱連衡とか、はもちろんのことであるが、國內においても、豫算の大膨脹、通貨の大増發、平和産業の萎靡と軍需工業の發達、生産・配給・價格・販賣・消費などの統制、思想の強要、監察の強化などは、必然的に生ずる。これらが、日本において、ヨーロッパにおいて、もしくは洽く世界において、現實に顯現してゐることは、人々のよく知つてゐると



ころである。

けれども、私は思ふには、これらの事實は、たとひ現下の大時局に相應しい廣大性乃至徹底性をもつて行はれてゐるとしても、未だもつて私が右にいつた平素と異なる大現象ではあり得ない。けだし、それらは、その廣大性乃至徹底性に拘らず、いはば主として政府乃至官廳に依つて行はれるものであり、そしてこれは、いはば平常の場合にも見られ得る形式であるからである。苟くも平素と異なる大現象が發現するとせられるからには、やがて、これらの外に、主として在野乃至民間の人々に依つて、或は國內的に、しかし又或は國際的に、現下の大時局に相應しい廣大性乃至徹底性を有つた何かの行動が爲されるに至るであらう。けだし、もしさうでないなら、今日、日本もしくは世界の主要諸國が歴史以來の未曾有の大時局に際會してゐるといふことは、これをいひ得ない筈であるからである。

在野乃至民間の人々に依つて現下の大時局に相應しい廣大性乃至徹底性を有つた何かの行動が爲されるといふのは、例へば、國民の一部乃至全部の自發的結束乃至

運動の如きものをいふ。かくの如き結束乃至運動は、今日ほどの大時局でなく、普通の大時局の場合においても、過去においては、隨分行はれた。前古未曾有の現下の大時局において、それが今日まで未だ生ずるに至らないのは、不可議なほどであるけれども、これは、未だ時機が熟しないためであり、その遂に不可避的に生ずるに至ることは、まさに疑はれ得ないところではなければならぬ。

日本乃至世界において、今日、在野乃至民間の人々の大運動の未だ行はれるに至つてゐないことには、もちろん、理由のあるところではあるが、その検討は、ここにこれを措く。私のここでいひたいことは、それが遂に早晚生ずるものであるとすれば、それを妄りに阻止しようとすることはもとより百害があつて一利のないといふこと、従つてそれに對して豫め今より適切な方策を立てることが甚だ重要であるといふことである。

かくの如き方策は、或は政府乃至官廳の側より、又或は在野乃至民間の側より、立てられ得るところであり、その内容も種々であらうが、今はその討究を省かう。



只ここで私が、本書の考究に導くものとして、特に取上げたく思ふのは、右にいはゆる適切な方策が、その實質において、いかやうに立てられようとも、常に知識階層の人々の指導を俟つことが必然的であり、且それが望しいといふことである。

この知識階層の範圍は、もちろん、單に官廳や民間の有識者に限らず、又實に廣汎な大衆層にも及ばなければならぬ。このことは、もし右に豫想せられる大運動が、只單に官廳の人々乃至官民合同の大運動でなく、一般大衆の大運動として顯現する可能性があるなら、尙更さういはれ得る。

日本もしくは世界の各國において、今日、一般知識階層に對する期待の大であるべき理由が、かくの如くであるとすれば、人々の多分ここで知りたく思ふことは、その知識階層の人々が現下の大時局において營んである情況に關してであらう。この問題も、これを仔細に考究すれば、極めて多岐に亙る。けれども、その中で最も重大な點としてここに確めておきたいのは、かれらが現下の大時局に對して現にい

かなる働き懸けを爲しつつあるかといふことである。

そこで問ふ、知識階層の人々は、この稀有の大時期に際して、何か深く期するところがあり、既に何かの熱烈な運動でも起しつつあるか。

これを事實について察するに、この間ひに對する解答は、全く否定的でなければならぬ。世界大戦(第一次歐洲大戦)後における世界の各地で行はれたマルクシズムの思想運動、イタリーのファッショ運動、及び最近のドイツのナチ運動は別として、逼迫した情勢の漸く破裂して生じた今日の大時局においては、一般知識階層の人々の活動は、却つてその華々しさを缺いてゐる。かれらは、熱烈な運動を爲すどころか、比較的少數の人々を除いては、街頭に立つて人々に話かけることすらもしてゐない。世界の主要諸國においてもさうであるらしく見えるが、日本においても、確にさういはれ得る。即ち日本においては、支那事變以前には、マルクシズムの運動の凋落後に、日本主義的運動があつたが、事變以後の大時局に入つては、この種の右翼的運動さへ、その精彩を甚しく缺いてゐるかに見える。



世界乃至日本において、知識階層の人々の運動の未だ活潑でないのは、かれらが、未だかれら自身の態度をいかにするかについて定見を有たないからである。かれらがこの定見を有たないことには、種々の原因があらうが、その中で、最も巨大な原因は、今日の時局があまりに廣大且重大であるので、かれらが従来用意した知識をもつて、それを見渡し、見透し、解決の方針を立てようとしても、一應は茫然として自失せざるを得ないことにある。

實に今日の時局は、一人の叡智をもつてしては、到底測ることを許さない複雑多態の内容を有ち、そして又それ故にこそ、多數人の叡智を網羅して、適切に結合することを必要とする大時局である。けれども、知識階層の人々の定見の有無に拘らず。時局は、その進展を止めない。しかも、時局の進展があれば、曩に見られたやうに、早晚、例へば、國民の一部乃至全部の者の自發的結束乃至運動の發生するとは、けだし、不可避的である。しかるに、かくの如き結束乃至運動が知識階層の人々の正鵠を得た定見に依つて導かれないと、決して望ましい結果を招來しないこと

は、けだし、亦自明である。

だから、かういふ場合に、國家が知識階層の人々に、難局の打開に役立つ限り、なるべく自由な言論を認めることが最も必要であるが、しかし、知識階層の人々も、亦、國法の範囲内において、支障のない限り、できるだけ自由に、腹藏なく所見を披瀝しあひ、そしてさうすることに依つて、自らの定見を得、且できるなら働き懸けをも爲し、運動をも起して、右にいはれた國民の一部乃至全部の者の大運動によい指導を與へることは、極めて望ましい。

日本においては、かうした努力は、支那事變の勃發以後、全く爲されてゐないのではないが、しかし、知識階層の人々の意見の多くのものが、その際、著しく低調であるのは、甚だ遺憾である。ところで、かれらの意見が今日發表せられてゐる程度の低調に止るなら、究極は國民の一部乃至全部の者の大運動に依つて影響せられることの多い現下の大時局も、もちろん、適正に解決せられ得るべき筈がない。

知識階層の人々は、尙一段とその工夫を深める必要がある。



昨夏、私は「日本と新國際主義」なる著書を公けにして、知識階層の人々の清鑑を仰ぐところがあつた。

「日本と新國際主義」にはゆる新國際主義の意義と價值とをここに詳細にすることは、これを控へるが、その意圖するところを簡單にいへば、社會の事情・狀勢・要求などの變遷に立脚し、國家間の現状打破を目指しつつ、しかもその協力諧調を計ることにある。

「新國際主義は、從來の國際主義即ち舊國際主義と異なる。もちろん、二者は、共に國際主義であり、そして國家間の協力諧調を計ることは、あらゆる國際主義に共通した特色であるから、この點においては、新國際主義も、舊國際主義と異なるところがない。只後者が國家間の現状維持を前提するに反して、前者は、現状打破を目指す點において、二者は、互ひに相反する」。

社會の事情・狀勢・要求などの變遷に立脚して國家間の現状打破を目指すことは、

たとへば體が大きくなるに従つて着物の仕立直しをすると等しく、當然であるが、これに反して、右の變遷があるに拘らず國家間の現状維持を志すのは、たとへば着物を本位にして、體の大きくなつてゐるのを無視すると等しく、無理である。だから、新國際主義は、眞國際主義であり、舊國際主義は、偽國際主義である。

新國際主義が、國家間の現状打破を目指して、しかもその協力諧調、即ち國際親善を計るといふことに關しては、それはいかにして可能であるかと怪訝する人々が、相當にあるやうである。けれども、新國際主義は、只徒らに國家間の現状打破を目指すのではなくして、社會の事情・狀勢・要求などの變遷に立脚して、切言すれば、歴史的必然性に則して、それを目指すものである。ところで、社會の事情・狀勢・要求などの變遷は避けられ得ない。だから、もし人々が一度歴史的必然性に氣が付くなら、例へば、少年が青年となり、壯年が老年となることから、少年相互の間、壯年相互の間に喧嘩が起らないやうに、國家間においても、(右のことは已むを得ないとして)、そのために鬭争の起ることは、漸次に已むに至るであらう。かくて、新國



際主義の主旨は、國家間にあつて人々が相互に話しあへば、よく解る。もし國家の要路に立つ者が、この主旨を體して、明智と達識と膽略と大度とをもつて行動すれば、國家間の現状打破を目指したからとて、國際親善は、決して害せられない。

新國際主義の實施は、だから、決して不可能ではない。不可能ではないが、しかし、それは、單純な平和主義でも戰闘主義でもないから、それを實施するには、常に偉大な精神・偉大な人格が必要とせられる。

新國際主義は、國際主義であるから、國際親善乃至國家間の協力諧調を念願する。けれども、新國際主義は、それだからとて、決して國家間の無理な、不合理な現状を打破する意圖を棄てるものではない。「日本と新國際主義」、否、それ以前の拙著「國際社會の將來と新國際主義」の中でもいつたことであるが、新國際主義は、人類全般の生々發達を實現しようとするものであり、「くに」本位主義に立脚するものである。新國際主義の主眼とするところは、ここにある。そのために、それは、平和を好むが、しかし、そのためには、それは、鬭争否戰爭をさへ避けない。新國際

主義は、決して單なる平和心醉主義と同一でない。

けれども、それかといつて、新國際主義は、もちろん、決して戰爭謳歌主義と同一ではない。新國際主義は、原則として戰爭を欲しない。戰爭が已むを得ず起つた場合でも、これを止めることが、「くに」の總體の者乃至人類全般の生々發達のために適するなら、それは、決して、これを持續しようとするものではない。國家的對立の時代においては、新國際主義は、國家毎に實施せられなければならないが、しかし、それは、たとひ戰爭の場合でも、自國家のことを考へることともに、他國家のためにも、その濫い心を分つものである。

新國際主義は、かくて、一方においては、平和主義と戰闘主義とを止揚して、その上に位するとともに、他方においては、「くに」本位主義に立脚して、人類全般の生々發達の大目的に仕へようとする。この主義の大特質は、ここに存する。眞に新國際主義の理論に従へば、もしすべての國家がこの主義に則つた場合には、戰爭ははじめよりあり得ないし、又もし他國家がこれに則らないで戰爭が発生した場合に



も、一國家がこれに則れば、その國家は、おのづから歴史的必然性に則して望しいものを實現する聖戰を戦ふことと爲り、そしてこれを持続して戦へば、必ずその戰爭に勝つに至る。

新國際主義は、支那事變に先立つて、私が首唱したものであつた。既に昭和十一年に、私は、前述の「國際社會の將來と新國際主義」なる論著を公けにしたが、その後、世界の情勢は、私が同著において豫見したやうな動向を採つた。殊に支那事變の發生・發展などは、新國際主義の理論的基礎として私が説いた歴史的必然性の顯現に外ならないと見られ得るものであつた。そこで私は、昨夏、更に、右にいつた「日本と新國際主義」なる著書を公けにし、事變の解決を合目的にししようと企て、人生・社會・國家・國交などの根本的理論と關聯せしめて、新國際主義の基礎を明かにし、世界大戰後の世界の情勢や、支那事變の解釋に關聯せしめて、その適用を確め、歐米諸國の人々や、支那の人々や、及び日本の人々に、その正しい態度乃至

行動の何であるかを告げて、その猛省や奮起を促すところがあつた。

新國際主義の名こそは新しい。けれども、それは、眞國際主義であり、そして多分、百年二百年は愚か永遠に妥當する眞理である。新國際主義の眞理であることは、今日、この主義の名稱をも理論をも知らない各國が——その眞の意思のいづこにあるかは別として、少くともその標榜において——この主義の實を挙げようと努力しつつあり、もしくは努力すると號しつつあることに依つても、知られる。今回の歐洲大戰において、その動機は何であらうとも、既に戰爭を開始しながら、戰鬥を開始せず、妥協に依つて平和的處理を開始しようとしたドイツの態度や、及びたとひその方策が根本的に誤つてゐたにしても、戰爭開始に至るまでにイギリス及びフランスの採つた態度は、主旨において新國際主義的である。日本が支那事變において大勝を博しながら、東亞の新秩序の建設に努力しつつあることに至つては、もちろん、立派に新國際主義の實施に他ならないものである。

一の國家が、その眞意がいづこにあらうとも、新國際主義的態度を標榜するなら、



それは、この主義の理論が眞理性を有つことの證左であり、又眞面目な國家が、現實にこの主義の實質を實施してゐるなら、それは、この主義が、將來、必然的に各國に依つて採用せられる可能性を有つことの證左である。

新國際主義は、かくて、漸次に、理論よりも先に實踐において、その道を固め、その眞理性を實證して行く。けれども、その効果を最も有意義に發揮して行くためには、それは、無意識的な實施から、意識的な實施に高められなければならないと同時に、假託的な實施から、眞實的な實施に高められなければならない。しかも新國際主義をかくの如き實施に齎すためには、人々は、この主義を無自覺裡に黙々として埋没せしめることの代りに、これをその理論の普及に依つて自覺裡に君臨せしめる必要がある。

新國際主義の實踐のためには、だから、これを實踐する國家がその理論を確實に把握することが肝要であるとともに、その國家が、その確實に把握した理論をもつて他の國家に呼び懸けることが肝要である。しかるに、國家がかくの如き行動に出

でるためには、國民がこの主義の理論について一般的に理解のあることが前提せられなければならない。しかも、これは、一國民だけに限局せられるべきものでない。新國際主義がいつこの國家に依つても採擇せられるべきものであり、そしていつこの國民も、この主義の實施に依つてその生々發達を促進せられるものである限り、その理論は、一般的に知られることが肝要でなければならない。

新國際主義の理論は、かくて布及を必要とする。啻に國內においてのみでなく、國外に對しても。

私は、新國際主義を眞理であると思ふから、そして日本の國家が否世界のあらゆる國家がこれに準據して行動することが、現下の大時局において、特に重要であると考へたから、この主義の理論の布及に關して非常な關心を有つ。それは、決して自分が案出した理論であるから知つて貰ひたいなどといふやうな子供じみた野望ではない。



新國際主義の理論を一般の人々に知つて貰ふためには、もちろん、知識階層の人々の援助を借らなければならぬ。けだし、この階層の人々は、既に前に指摘せられたやうに、早晚、或は不可避免的に生ずるであらう國民の一部乃至全部の者の大運動を指導することに依つて、今日の大時局を最も適正に解決するであらうからである。いかにも、この階層に屬する人々は、それに屬しない人々よりも、一層懷疑的であり、且しばしば冷笑的であり、又應對に困難であり、極めて呼び懸けにくい。けれども、知識階層に屬する人々は、それに屬しない人々よりも、一層、理解力において勝れてゐる。その眞理を好愛すると見られなければならないことに至つては、けだし、自明である。新國際主義の理論をかれらとともに討議すれば、かれらといへども、必ずそれを知ることに対して熱情を有つ。

念のために、私は、ここに知識階層に屬する人々の範圍を明確にしておく。ここに知識階層とは、社會、切言すれば、一定の時代と場所とを前提した社會即ち「くに」において普通と稱せられる程度において、そこに具る文化を利用しもしくは多少向上

せしめ得る能力を有する人々の總體をいふ。

知識階層に屬する人の範圍は、だから、時代と場所とに依つて大いに異なる。日本においては、大體において、小學校教育以上の教育を受けた人々もしくはそれと同等の能力を有する人々は、これに屬するといはれ得よう。もちろん、その際、履歴の何であるを問はない。かくて、人々は、例へば、日本においては、小學校を卒業して、その後少しく知能を磨く機會を有しさへすれば、必ず知識階層に屬する。知識階層は、多くの人々が先入主的に豫斷するやうに、必ずしも中産階層に屬するものではなく、有産階級にも及び、又無産階級にも互る。恰かも知識階層に對する無知識階層が、無産階級にも、中産階級にも、有産階級にも存すると、全く同一である。私は、知識階層の人々は、日本においては極めて多數に互ると思ふ。

私は、從來、常にかくの如き知識階層の人々に多くの期待を懸け、そしてこの理解力のあり、眞理を好愛する知識階層の人々が、社會において指導的地位を得るのが、必然であり、且望しいと考へてゐる。このことは、私は、何も新國際主義の理



論の普及のためにさう考へたのではなかつたが、しかし、今は、先づ新國際主義の理論をこの階層の人々に知つて貰つて、その共鳴を得なければならぬ。知識階層の人々さへ、それに共鳴せられ、その布及に援助せられるなら、すべての國家は、皆新國際主義に準據した行動を爲すに至る。

私は思ふ、知識階層の人々は、その社會における存在理由を示すために、現下の時局において、實に千載一遇の機會を與へられてゐる。かれらは、須らく奮起すべきである。かれらが一度奮起しさえすれば、かれらの有つ偉大な機能は、立ちどころに現れ、かれらの有つ重大な役割は、立派に果される。但し私は知る、かれらは容易に奮起しないことを。かれらの奮起しないのは、かれらが能力がないためではない、勇氣がないためではない、主としてかれらが誤つた思想に捉へられてゐるからである。誤つた思想とは何か？　かれらが、知識階層に屬するといふ性質上、無力であると思込んでゐることは、即ちこれである、

新國際主義の理論の布及と實施とのためにもさうであるが、しかし、それを離れ

て、一般に多くの眞理の普及と實施とを計るためにも、知識階層の人々のために、この殆んど牢乎として抜けなにかれらの無力思想の誤謬を白日下に明確にしたい。この一篇は、かういふ趣意において、書かれたものである。

徹底的に――疑ひの餘地を残さず――問題を解決するために、私は、この書において、たとひ一見縁遠くとも、しかし周到の思惟には缺くことを得ない、究極的なものの論議から筆を起さうと思ふ。

「一物を知るとは萬物を知るといふことである」



## 一 社會における諸問題と知識階層

### イ 社會における諸問題と社會問題

人類は、この世に生れれば、生きがひのある生活を営むのが當然であり、そして社會は、人類をしてかくの如き生きがひある生活を営ましめるのが當然である。

生きることは、一の大きい努力であり、そしてよく生きることは、更に又一の大きい努力である。生れた者は、生きようとし、生きようとする者は、更によく生きようとすることを通常とするから、ここに人類の生存及び生活を繞つて、諸多の問題が生ずる。

かくて、社會の存するところ、常に人々の生存及び生活を繞つて諸多の問題が生ずる。これらの問題は、生きようとし、よく生きようとする者だけに關する場合もないではないが、多くは直接にもしくは間接にこれらの者の相互に關するものとして、發生することが多い。

社會において生ずる諸多の問題の中で、社會全般の利害に、別言すれば、社會における總體の人々の生々發達に重大な影響を有するものは、これを廣義における社會問題といふ。

廣義における社會問題は、人々の生存及び生活を繞つて生ずるものであるが、この生存及び生活は、物質的生存及び生活と精神的生存及び生活との二に分けて考へられ得るから、右の社會問題も、物質的生存及び生活を繞つて生ずるものと、精神的生存及び生活を繞つて生ずるものとに別けて論ぜられ得る。これらの二の社會問題の中で、前者も後者も、生きること及びよく生きることに關係して生ずるとはいへ、いづれかといへば、後者がよく生きることに一層多く關係して生ずるに反して、前者は、生きることに一層多く關係して生ずるから、一層切實であり、且前者も後者も、生きることと、よく生きることとに寄與するとはいへ、いづれかといへば後者が一層高級な方面において寄與するに反して、前者は、一層基礎的な方面において寄與するから、一層深刻である。だから、社會問題は、社會が將來高度に



發達したなら、多分、主として精神的生存及び生活を繞つて生ずるでもあらうが、それまでは、主として物質的生存及び生活を繞つて生ずる。少くとも、過去より今日に至るまでの社會問題は、大方、前者ではなく、後者であつたといはれ得る。

物質的生存及び生活を繞つて生ずる社會問題は、それが恰かも物質的生存及び生活を繞つて生ずるものであるために、常に直接もしくは間接に、生業に關聯する。ここに生業とは、生存乃至生活資料を獲るためにする繼續的な事務處理乃至勞働、又はこれに直接に連繫する繼續的な事務處理乃至勞働をいふ。例へば、農業・林業・畜産業・鑛業・工業・商業・運送業・倉庫業・銀行業・取引所業務などは、皆これに屬する。社會問題がこれらの生業に關係して生じた場合には、それが直接に生業に關聯したといはれ、そしてそれがこれらの生業に關係せず、只これらに甚大な影響を有するものとして生じた場合には、その社會問題は、間接に生業に關係したといはれる。前者は、例へば、右の産業乃至金融業などの領域において生ずる社會問題であり、これに反して後者は、例へば、失業・貧民・衛生などや、民族・階級・國家などに關して生ずる社會問題である。

社會問題の中で、直接に生業に關聯して生ずるものは、一定の生業に従事する者の利害に甚大な影響を及ぶことがあつても、多くは社會の總體の者の生々發達に顯著な影響を有することが少く、従つて社會問題として重大でないことが多いが、これに反して、間接に生業に關聯して生ずるものは、たとひ多數の生業に従事する者の生々發達に影響するところが顯著でないことがあつても、しかし、社會の總體の者の利害に甚大な影響を現實に及ぶものであるから、社會問題として重大である。だから、以下、私は、社會の問題の考究において、前者を除外して、只後者のみについて語ることにする。後者は、これを狹義における社會問題と稱することができる。

間接に生業に關聯して生ずる社會問題の中の最も重大なものに屬するものとして、民族相互に關して生ずる問題即ち民族問題、階級相互に關して生ずる問題即ち階級問題、及び國家相互に關して生ずる問題即ち國家問題の三を採る。狹義におい



て社會問題といへば、民族問題、殊に階級問題のみを指し、國家問題をばむしろ社會問題と對立せしめて考へることが通常であるが、しかし、國家と民族乃至階級とは社會において重疊的に共存するものであるから（日本と新國際主義、参照）、これらのものに關した問題を社會問題といふ限り、それに關した問題を社會問題といふことは、もちろん、當然であらう。國家問題を社會問題と對立せしめて考へるのは、社會問題をば社會内の問題として理解し、そして國家は社會内に存しないので、却つて社會と合致すると思惟するに出るのであらうが、これは、もとより、國家並びに社會の實體に關して明確な認識を缺いてゐるものでなければならぬ。

民族問題・階級問題・及び國家問題が社會問題として最も重大なものに屬するのは、それらが社會の總體の者の生々發達に極めて重大な影響を有することに依り、切言すれば、人々の生きようとして乃至よく生きようとすることに、根本的な影響を及すことに依る。これらの問題が、世界的舞臺において人類の歴史に重疊の波瀾を惹起したことは、過去の記録を参照することに依つて、もとより疑はれ得ない。

信仰問題も、過去においては、人々の生きようとし乃至よく生きようとすることに根本的な影響を及すものとして、これらの問題と等しく、世界的舞臺において人類の歴史に波瀾を重疊せしめたが、しかし、これに關しては、私は、その將來同様の意義を有し得ることを疑ふから——のみならず、それは、精神的生活を繞つて生ずる問題として、ここに除外せられるを適當とするから——これを措く。

民族問題・階級問題・及び國家問題は、かくて、社會問題の最大なものに屬する。但し、これらの問題は、往々にして特定社會の埒外に逸して、その以外の社會の人にも廣い範圍において影響を及すことがあるから、それらは、この特定社會の觀點から、社會問題と呼ばれないで、むしろ、その規模の大きさからして、世界的問題と稱せられることが多い。民族問題もさうであることが多いが、國家問題に至つては、殊にさういはれることが多い。階級問題も、特定社會内に局限せられないで、隣接社會の階級と階級とが相互に提携することに依つて勃發する場合には、亦世界的問題と稱せられ得る。



世界的問題としての民族問題・階級問題・及び國家問題は、多分、永遠にその發生を阻止することができないであらう。

(イ) 世界中の諸民族が血液的に融合して外觀的にも無差別の一と爲るといふことは、遠い將來においても考へられ得ないことであり、世界中の諸民族が場所的に混住して、心理的に全地球的な一と爲るといふことも、亦、容易に起り得ない。

(ロ) 地球上の諸社會は、時の経過とともに、ますます擴大して、早晚、地球の全域に互つた世界社會を形成するに至る。けれども、地球上には、究極の未來においても、二の極大國家が成立するから、諸國家は、たとひ將來その擴大を續けても、決して單一の世界國家と爲らない。(拙著、國際社會の將來と新國際主義、同拙著、日本と新國際主義、参照)。

(ハ) 社會に階級が喪失することは、一見、可能なやうでもあるが、しかし、今日の有産・無産の兩階級が喪失しても、支配階級と被支配階級との差別は、多分、永劫に存する。のみならず精神労働者と肉體労働者とは、將來、それぞれ階級を爲

すに至らないとは限らない。

かくて、複数の民族・複数の階級・及び複数の國家の存するところ、そこにそれらのそれぞれの間はその對立があり、對外的に又對内的に何らかの問題の發生を避け得ない。只それが、將來は、過去乃至今日よりも、後に知られることに依つて漸次に解決せられ易くなることに期待を懸けられ得るに過ぎない。

#### □ 權力乃至實力と知識階層

社會における諸問題、殊に民族問題・階級問題・及び國家問題は、適當に且根本的に解決せられなければならない。問題を、殊に大問題を根本的且適當に解決することは、社會の總體の者の生々發達を促進するからである。

民族問題・階級問題・乃至國家問題の解決は、或は平和的手段に依つても爲され得るべく、又或は鬭争的手段に依つても爲され得る。解決が鬭争的手段に依つて爲される場合はもちろんのこと、それが平和的手段に依つて爲される場合にも、それには、直接もしくは間接に常に權力が前提せられる。即ち、その解決に従事する人



々は、これらの問題の解決に當つて、或は権力を使用するかも知しくはこれと衝突し、或はさうでなくとも、権力の所在・制限などを、その解決の目標とする。

権力とは、優越した意思力といふ。権力は、往々にして暴力と同視せられるが、これは、決して眞正でない。暴力とは、別段の理由がなくして人を損ふことに向けられた意思力の發動をいふ。権力は、とかく暴力と爲り易く、そしてそれ故に、これと混同せられた社會もあり、時代もあるが、しかし、その本質においてこれと差別せられなければならない。権力は、それが正當に行使せられる場合には、決して暴力と爲るものではない。(拙著、行政機構の基礎原理、参照)

自然界において、力が支配するやうに、社會においては、権力が支配する。自然界において、強い力が弱い力に優越するやうに、社會においては、強い意思力が弱い意思力に優越する。優越した意思力、それは、即ち権力である。(拙著、前掲、参照)。

人類は、先天的に相互に相異し、且後天的に相互に相異し行くが如くに、先天的

に且後天的に相互に意思の強弱を異にする。そこで、社會には、常に権力が支配する。権力の法制上乃至社會的規範意識上の承認は、多分、將來、ますます局限化して行くであらうが、そして後に見られるやうに、さう考へることに理由があるが、権力の事實的支配は、それが漸次に正當に行使せられて行くとしても、恐らくは、無始の過去から無終の未來まで續くであらう。

社會における権力の支配は、常にそこにおける不對等者關係を惹起する。それが法制的に承認せられた場合には、これは、一層顯著に現れる。社會における不對等者關係は、権力即ち優越した意思力以外のもの、例へば優越した腕力・肉體力などの實力に依つても生ずるやうにも思はれるが、しかし、實際上、これらの實力は、優越した意思力の形成に役立つだけで、眞實に不對等者關係を惹起するものは、この優越した意思力即ち権力である。その證據には、社會には、腕力・肉體力などの實力に乏しくても、その強烈な意思力だけで、人を慥伏せしめ、これを左右する者が、決して少くない。尤も権力も一の實力ではあるが、それは、決して單にいはゆる實



力ではない。ここに實力とは、物もしくは人に影響する人の力をいふ。

権力は、かくて本質的に優越した意思力であるが、しかし、この意思力は、大體において、もしくは結局のところ、いはゆる實力に依つて決定せられ、もしくは支援せられる。この意味において、實力は、権力を形成するといはれ、もしくはその背景を爲すといはれ得る。

實力は、種々の觀點より種々に別たれるが、しかし、それが権力を形成し、もしくはその背景を爲す意義においてこれを分ければ、次ぎの五の事項に關聯して生ずる。血統に關聯して生ずる實力、武勇に關聯して生ずる實力、財産に關聯して生ずる實力、知識に關聯して生ずる實力、及び高德に關聯して生ずる實力は、即ちこれである。これらの中で、第一のものと第三のものとは、法制乃至社會的規範意識の承認に依つてはじめて成立するが、その他のものは、この承認に係りなく成立するものである。法制乃至社會的規範意識の承認に依つて成立する實力には、右の外に年齢に關聯して生ずる實力・性別に關聯して生ずる實力などがあり、そしてこれら

も過去において重大な意義を有したことがあるが、しかし、右の五の實力に比して劣勢的であるから、これを措く。血統に關聯して生ずる實力を血力と名づけ、武勇に關聯して生ずる實力を武力といひ、財産に關聯して生ずる實力を財力と呼び、知識に關聯して生ずる實力を知力と稱し、高德に關聯して生ずる實力を徳力と唱へることとする。

社會において存するこれらの實力は、その法制乃至社會的規範意識の承認に依つて成立するものは、その承認の存する限り、及びこの承認に係りなく成立するものは、常恆的に、それぞれ権力を形成し、もしくははその背景を爲す。もちろん、いかなる實力が社會において最も多數に権力として存し、もしくは最も強大な権力として存するかは、時代と場所とに依つて、否、切言すれば、社會の發達に依つて異なる。けれども、いかなる社會においても、右の諸實力が常にそれぞれ権力として存することだけは、これを認めなければならぬ。

社會における諸問題、殊に民族問題・階級問題・國家問題などの如き社會問題乃



至世界的問題は、これらの實力に無關係に解決せられ得ない。それらの諸問題が、これらの實力に依つて形成せられ、もしくはこれらの實力が背景を爲すことに依つて成立する權力に無關係に解決せられ得ないことも、亦當然である。そこで、右の諸問題の解決のためには、人々は、いかなる種類の實力乃至權力に最も多く注意を拂ふべきかについて顧慮しなければならぬ。右の諸問題が實力乃至權力をもつて解決せられる必要がある場合には、尙更であるが、實力乃至權力について解決する必要がある場合にも、亦さうである。

民族問題・階級問題・乃至國家問題の解決には、かくて、種々の顧慮が必要であるが、私は、これらの問題の巨大性と複雑性とに鑑みて、その顧慮そのものにおいて、既に博識と明智とが必要であると思ふ。その解決に博識と明智とを必要とすることに至つては、尙更である。この意味において、私は、これらの問題の解決に、知力に、否、知力に依つて形成せられもしくはその背景に依つて成立する權力に、多くの期待を懸ける。

民族問題・階級問題・乃至國家問題の解決に知力乃至知力的權力に多くの期待を懸けなければならぬことは、原始的な社會と極めて發達した社會とを除いては、いかなる社會においても同一でなければならぬ。尤も過去乃至現在において、これらの問題の解決が、必ずしも常に十分に知力乃至知力的權力に依つて爲されたに限らないが、少くとも將來は、これに依つて爲されることの多くなることは、期待のできることであり、且期待せられなければならない。知力乃至知力的權力を有つ人即ち知識人でなければ、これらの複雑且巨大な問題の解決の目標を立て得ないし、處理の方法を知らない。だから、これらの問題の解決に、知識人が指導的地位を占めることは——その望しいとせられることに關しては、別に論證が必要であるとしても、少くとも——必然であるとせられ得なければならない。



## 二 將來社會における知識階層の優越化

知識階層の人々が、過去乃至現在はともかくとして、將來、必ず社會における複雑且巨大な問題の解決において指導的地位を占めることの必然性は、(次ぎの私の豫測がもし誤らないなら)、まさに自明であるとして認められ得るであらう。

私の見るところに依れば、將來社會においては、知力が主たる權力として存する時代即ち知力時代が必然的に到來し、そしてこの時代においては、知識が進歩し、知識人がますます多数と爲り、しかもこれらの人々はその知識の活用を爲すことに依つて衣食の資を得るから、いはゆる精神的勞働者乃至俸給生活者の數は、必然的に激増する。

このことを、私は左に分説しよう。

### (一) 社會の變遷と知識階層の地位の重大化

社會において、血力・武力・財力・知力・及び徳力が、それぞれ權力を形成しもしくはその背景を爲して存することは、既に私は、前にこれを述べた。これらの實力乃至權力は、原則として、いかなる社會においても雜存するが、しかし、それにしても、その社會に支配的に存する實力乃至權力に従つて、社會の變遷に時代を分けるなら、社會は、過去において、血力時代から、武力時代を経て、今日の財力時代に入り、そして將來は、知力時代を経て、徳力時代へと趨くといふやうに、極めて特徴的に五の時代的順序においてその變遷を示され得る。

けれども、社會の變遷は、種々の觀點より種々に分たれ得るものであるから、他の觀點に立てば、それには、又他の時代的順序が分たれ得る。だから、今右に見られた實力乃至權力の特徴に依る時代の分類への關聯において、他の標準に従ふ分け方を示すなら、必ずしも嚴正であり且網羅的ではないが、しかし、主要的に且顯著に、社會は、氏族社會より封建社會へ、封建社會より資本主義社會へ、資本主義社會より全同主義社會へと變遷するといはれ得る。



氏族社會は、血力時代の社會で、主として血力が支配的な權力と爲り、封建社會は、武力時代で、武力が權力として支配し、資本主義社會は、財力の時代で、主として財力が權力の背景を爲し、そして全同主義社會は、知力乃至徳力の時代で、主として知力乃至徳力が支配的な權力として存する。但し、全同主義社會をその變遷の時代的順序に従つて分ければ、正義社會・友愛社會・及び同和社會の三と爲る。正義社會には、知力的權力が支配し、友愛社會には、知力が徳力と合一して權力として支配し、そして同和社會には徳力的權力が支配する。

氏族社會において血力が權力として支配したこと、及び封建社會において武力が支配的な權力として存したことは、過去の事實であるから、歴史に徴して知られ得るべく、又資本主義社會において財力が權力の背景を爲すことは、必ずしも現在の事實に徴して知られ得ないではないが、しかし、いはゆる全同主義社會は、將來、出現するべき社會であるから、それにおいて果して知力乃至徳力が權力として支配するか否かに關しては、右とは異なつた特別の論證が必要である。

いはゆる全同主義社會は、例へば Nationalsozialist を Nazi といふやうに、全部協同主義を略稱したものであるが、このことに關しては、私は、既に他の機會においてこれを述べてゐる(拙著、日本と新國際主義、参照)。ここに全部協同とは、社會において、國家は國家と、民族は民族と、階級は階級と、その他、例へば宗教團體は宗教團體と、政黨は政黨といふやうに、あらゆる個體がそれに同心協力して協同體を作り、かくて、これらの總體として社會をして協同體たらしめることをいふ。このことに關しても、同じ機會において、私は、既にこれを述べておいた。

全同主義社會の中で、友愛社會及び同和社會への言及は暫くこれを措いて、正義社會に關してのみこれを述べる。正義社會において知力的權力が支配するといふことは、下の論據に依つて確められる。知識が非常に進歩すること、及び知識人が非常に増加するといふことは、即ちこれである。

將來社會即ち來るべき全同主義社會の最初の段階たる正義社會において、知識が非常に進歩するといふことは、一に前代の恩惠に基づき、そして他には、その時代



の人々の努力に基づく。既に私は、他の機會において指摘したところであるが、社會は、その變遷の過程において、人々の能力を向上せしめ、思想を精良化し、財即ち經濟財乃至思想財を蓄積し、擴充し、且向上せしめる。(拙稿、社會史觀要綱、關西學院大學、法文學部研究年誌、第三輯、参照)。これが、即ち前代の恩惠である。かくの如き前代の恩惠があれば、人々は、これを利用することを餘儀なくせられ、且他との對抗上これを量的にも質的にも進歩せしめることを必然にせられる。これが、即ちその時代の人々の努力である。これらの二の原因に依つて、將來社會においては、知識は、現在社會の發展した知識の成果を傳承して、非常に進歩する。既に知識が非常に進歩するとすれば、知識人が、その社會において、非常に増加することは、亦、認められるべきことでなければならぬ。

將來社會において、知識が非常に進歩し、且知識人が非常に増加するといふことは、その反面において、知識及び知識人が非常に需要せられ従つて又尊重せられることを意義するものでなければならぬ。既に將來社會において、知識が非常に進

歩し且尊重せられ、又知識人が非常に増加し且尊重せられるとすれば、知力がその社會において支配的權力として存することは、もとより明白である。  
將來社會において、知力が支配的權力として存するといふことは、知識人が權力把持者即ち權力者として存するといふことである。

## (二) 精神的労働者の増加と知識階層の地歩の強力化

將來社會において知識人が非常に尊重せられるといふことを認めても、尙その社會において知識人が權力者として存するといふことに幾分の疑問を残す理由と爲るものに、知識人が失業もしくは就職不能に依つて、無産階級に轉落する事實がしばしば存するといふことである。

知識人に遊食者が多い。このことは、かれらが、有産階級に屬し、自己の世帯のみか數多の世帯を、數代に互つて維持する資産を有する場合には、もとより多く意に介しなくともよいが、これに反して、かれらが、中間階層乃至無産階級に屬し、生業に従事する必要もあり意思もあつて、しかも失業し乃至就職不能に陥り、依つ



て遊食する場合には、實に由々しい現象である。けれども、知識人が失業もしくは就職不能に依つて無産化することを、いかに豫防し且救済するべきかは——たとひ社會の總體の者の生活發達のために大いに顧慮せられなければならないとしても——この問題ではない。今はその豫防乃至救済の方法ではなく、知識人の將來が、考究の目的である。だから、ここに問題と爲るのは、知識人がかくて一般に無産化し、従つてかれらが將來社會において權力者と爲るといふことは、果して夢想に終るか否かといふことである。

私の見るところでは、知識人は、今日も、將來も、産業上の波瀾に依り都合に従つて、失業もし、又就職不能にも陥る。けれども、かれらは、一般に無産化するものではない。かれらの中の失業者乃至就職不能者は、一時的にもしくは一代的に無産化する。けれども、かれらの多くの者は、さうでないのみか、就職に依つて、その地位を向上せしめ、啻に中産階層に屬する者としてその地歩を鞏めるのみでなく、中には有産階級に屬するに至る者さへもある。失業者乃至就職不能者の數が相當に

あるにしても、就職者の數も、その有産化する者の數も、漸次に多くなる。

ここに知識人の就職者とは、知識を働かす者即ち精神的労働者として、國家及びその他の公共團體の事務に參與し、又は公益團體乃至産業團體の事業の經營に參加する者をいふ。いはゆる俸給生活者は即ちこれに該る。

知識人の就職は、過去においては、主として國家及びその他の公共團體乃至公益團體の事務參與に限られ、そしてその數も決して多くなかつたが、今日はそれが巨大な數に上るやうになつた。産業その他の事業の經營に参加する者は、主として商業方面から初つて工業の方面に及び、その他、僅少なから農業・林業・漁業・鑛業などの方面にも進出し、殊に運輸業・通信業・金融業などの方面には、大發展を爲すに至り、その數が今日國家及びその他の公共團體乃至公益團體の事務參與者の數を凌ぐほど、極めて夥多である。俸給生活者の激増は、かくて、最近において特に顯著である。

俸給生活者即ち精神的労働者の年とともに増加して行く割合は、肉體的労働者の



それよりも、確かに大であらう。今退いて統計に徴してこの點を立證したく思ふが、一方においては、私は、この書をなすべく小冊子にしようとする欲求を有つことと、他方においては、私は、さう判断することに理論的根據があることを思ふこととに依つて、その勞を省かう。肉體的勞働者即ち賃銀生活者は、たとひ産業の發達とともにその絶對數において増加して行くとしても、機械その他の利用に依つてその相對數において、或は減少して行く。けれども、精神的勞働者即ち俸給生活者は、これに反して、産業以外の方面においても必要とせられ、且産業の方面においても、機械その他の利用とともにますます需要せられるから、啻にその絶對數においてのみでなく、その相對數においても増加して行く。これが、即ち右にいふその理論的根據である。

俸給生活者の中で、産業以外の事業乃至事務に參與する者、もしくは一般に經濟的活動に従事することの少い者は、暫くこれを考量の外に置く。經濟的活動に従事する俸給生活者、なかんづく殊に産業の經營に参加する俸給生活者は、過去におい

ては、その數が決して多くなかつたために、從來の經濟學においては、多く觀過せられた。正統經濟學者達は、スミスの理論を承繼して、多くは、經濟活動を爲す者をその收入の種類に従つて資本家・地主・及び勞働者の三に分け、その際、資本家は利潤を、地主は地代を、そして勞働者は賃銀を得る者であると爲し、マルクス主義の經濟學者達も、大體、これに従つて、資本家及び地主を有産階級、勞働者を無産階級と爲し、そして前者は後者を $\times\times$ する者であると考へた。即ち前の場合にも、後の場合にも、かくて、資本家は、常に企業者と殆んど同一視せられ、そして企業に従事する精神的勞働者の地位は、後の場合、殊に前の場合において、無視乃至輕視せられた。けれども、

先づ第一に、資本家は、常に必ずしも企業者でなく、又企業者は、常に必ずしも資本家ではない。二者は、過去において多く合致したし、今日においても合致することを原則としてゐるとしても、産業の發達とともに、將來は相互に分離し、そして企業者は利潤を收め、資本家は利子生活者の地位に追ひやられる傾向にある。



次に第二に、企業に従事する精神的労働者は、もちろん、資本家として活動してゐるのではないが、しかし、又商品を生産する肉體的労働者として活動してゐるでもない。かれらの経済的役割は、獨特である。かれらの社会的地位は、肉體的労働者の地位と多く異なるところのない者もあるが、又資本家の地位とさして異なる者もある。

即ちかれらのすべては、もちろん、企業者ではないが、しかし、その活動の性質において企業者と類似し、畢竟するに、企業者とともに企業の経営に参加する者として概念せられ得る者である。かれらは、資本家でなく、又肉體的労働者でない。しかも、かれらの数は、年とともに激増し、そしてかれらの経済的役割は、ますます重要を加へ、且その社会的地位は、ますます有力となる。だから、正統経済學者達乃至マルクス主義の経済學者達が、企業者は別として、その以外のかれらを見無視乃至輕視したのは、たとひミス乃至マルクスの時代にかれらの存在が顯著でなかつたに職由するものであるとしても、正當でないといはれなければならぬ。

俸給生活者が、かくて、將來社會において有望な地歩を占めるに至るものであるとすれば、このことは、知識人が知識人たる以外の資格においても、權力把持者たるべき可能性のあることを示すものであり、知識人が將來社會において權力者として存することを一層力強く確證するものに外ならない。

知識人が將來社會において權力者として存し、知識階層が強力化せられることは、今日の知識階層の人々が、たとひ口に知識階層の没落を唱へ、且心にこれを信じて、尙自らを、もしくは自らの子弟を、この階層に置かうとして、不斷の努力を用ひつつあるに徴しても知られる。歴史は、常に黙々として動き、人々の認識する否とに拘らず、その必然性に従つて將來に約束せられた情況を社會において實現する。つまり、知識階層の人々は、その階層が將來社會において強力化することは歴史的必然性の約束であるために、これを認識しないに拘らず、恰かめかれらの口にするところと逆の方向に、この必然性を現實化する努力を爲しつつあるのではなからうか？



### 三 將來社會の特質と社會における諸問題の解決

社會における諸問題の解決、殊に民族問題・階級問題・國家問題などの如き世界的問題の解決は、かくて、知識階層に依つてのみ可能であり、且將來必然に爲されるが、しかし、私のここに強調したいことは、それが只單に必然であるといふに止まらず、望しいといふことである。

私が特にこれらの問題を知識階層に依つて解決することを要望することには、更に大なる理由がある。これらの問題をこの階層に屬する人々、即ち知識人の手に依つて解決することが、社會の望しい發達に合適し、且その總體の者の生々發達に望しい効果を與へるといふことは、即ちこれである。

今このことの立證は、社會の實質の變遷の側からも、問題の實質の變遷からも、爲され得るが、ここでは、先づ前者のみを説き、そして次ぎに後者に及ぶ。

#### イ 社會の實質の變遷と知識階層

社會の實質の變遷は、將來社會においては、既に右に知られたやうに、知識及び知識人が支配するから、おのづから、知識及び知識利用の實質の變遷に依つて知られ得なければならぬ。

(一) 先づ知識の實質の變遷に關しては、次ぎのやうなことがいはれ得る。

(イ) 知識は、概念と判斷との二の方面に分けられ得るから、概念及び判斷の二方面において發達する。

概念の方面において發達した知識は、これを博識といひ、判斷の方面において發達した知識は、これを明智といふこととする。いはゆる物識りは、博識の人であり、そしていはゆる物解りは、明智の人である。知識を刀劍に譬へれば、物識りは、鈍刀・鋭刀を分たず、これを蒐集した人であり、そして物解りは、正宗の利刀を研いでこれを身に帯びた人である。

博識は、いはば眞偽に多く拘らない知識であるから、實行を容易にする。けだし、事物の概念さへあれば、あとは、天稟もしくは経験に基づき持ち合はせの判斷で、



實行が可能であるからである、これに反して、明智は、最も多く眞偽に拘る知識であるから、實行に暇どらしめる。けだし、眞偽は、實行に際して、或は事物に關し、又或は目的乃至方法に關して、事毎に問題と爲るからである。

博識は、典型的には、具體的知識乃至實質的知識として存し、通常、眞偽の決定に多くの意義を求めない、もしくはその決定に多くの困難を感じない時代と人との間に喜ばれる。かくて、物識りは、主として簡単な事件に關して、原始社會もしくは有閑社會において珍重せられる。これに反して、明智は、典型的には抽象的知識乃至形式的知識として存し、通常、眞偽の決定に大なる意義が認められ、もしくはその決定に大なる困難の存する時代と場所とにおいて尊ばれる。だから、物解りは、主として複雑な事實に關して、理論的にもしくは實踐的に眞剣な解決を欲する社會において、推敬せられる。

博識も、明智も、もちろん、發達した知識であるから、尊重せられるに値するが、しかし、將來は、いづれかといへば、知識は、前者よりは、後者の方面にその意義

を加へて行くであらう。けだし、時代の進歩・社會の發達とともに、事件乃至事物は簡單より複雑へと進み、その解決の意義が大と爲るに反して、困難は、ますます加らないことを得ないからである。

(ロ) 知識は、可能的なものに關しても存するが、しかし、本來、現實的なものに關して生じ、且現實を知らうとする要求において生じた。可能的なものに關して存する知識を可能的知識、及び現實的なものに關して存する知識を現實的知識と稱する。前者はもちろん後者に立脚するが、しかし二者は、畢竟するに、現實を知らうとする要求において成立したものに外ならない。

可能的知識であると現實的であるとを問はず、すべて知識は、理論的知識と實踐的知識との二に分たれる。知識は、本來、現實を知らうとする要求において生じたものであるから、それは、初期の情況においては理論的知識と實踐的知識とを分たない——二者を萌芽として包有する——全一態において存した。原始社會の人々の知識は、幼年者のそれと等しく、多分、かくの如きものであらう。しかるに、現實



を知らうとしても、現實は、絶えず變遷し、そしてその真相は、容易に知られ得ない。そこで、一方においては、移り行く現實に追隨して、主として現實的知識の方面において實踐的知識が發達し、そして他方においては、不動の真相を追求して、現實的知識否殊に可能的知識の方面において理論的知識が發達した。

けれども、知識は、その本來の要求において全一態において存すべきものであるから、實踐的知識と理論的知識とは、相互に分離し行くに従つて、相互に牽引する。かくて、實踐的知識は、はじめは真相の追求に係らないものとして學問の領域から除外せられたが、後には漸次に學問にまで高められ、又理論的知識は、長く學問を代表し、そしてそれが現實を遠く隔離した場合に學問といへば現實に迂濶なものであると考へられたが、後には漸次に現實に指導を與へ得るものと爲つた。

即ち理論的知識と實踐的知識とは、將來、次第に結合し、提携して行くから、それらの發達の極致においては、多分、渾然融和して一の統一態として存するに至るであらう。

(二) 次ぎに、知識利用の實質の變遷に關しても、次ぎのことがいはれ得る。

知識は、そのはじめは利の目的に仕へた。けだし、人類は、無意識的且無自覺的に、古來、社會の總體の者の生々發達のために行動し來りつつあつたが、最初はその脆弱性に基づき、先づ生きることに努力しなければならなかつたからである。

利の追求は、少くとも意識的乃至自覺的には自利から起つて他利へ進み、小利から初つて大利に及んだ。けだし、社會の發達と人類の強化とは、それを可能ならしめたからである。原始社會の人々も、小利よりも大利に及び自利よりも他利に動いたことは、もとより認められないのではないが、しかし、かれらにとつては、かくの如き行動は、大方、無意識的且無自覺的であり、その意識的且自覺的行動が、却つて、自利及び小利を追求したことは、亦認められなければならない。

しかるに、社會が發達し、人類が強化し、そして人々が意識的且自覺的に他利と大利とを考へ得るに至つたときに、ここに人々の意識に分裂が行はれ、そして利の外に正善を知るに至つた。その意識に分裂が行はれたのは、人々が、自利と小利



とに食指が動きつつも、他利と大利との實現の可能性を考へるに至つたからであり、そしてその正善を知るに至つたのは、人々が、先天的に使命として與へられ、そしてそれ故に、悠久の昔から無意識的且無自覺的にもその實現に努力し續けた社會の總體の者の生々發達が、自利と小利とではなく、むしろ他利と大利との追求に依つて、促進せられることに想到したからである。

ところで、既に他利と大利とを追求することが正善であれば、これを妨げる自利と小利との追求は、正善でない。正善でないものは、不正もしくは悪である。正善と不正善もしくは悪との認識は、何が自利乃至小利であり、又は何が他利乃至大利であるかの認識と同様に、眞偽において問題とせられ得る。

人類は、本來、社會の總體の者の生々發達のために努力することが必然であり、そしてこの努力は、亦正善の追求を必然ならしめるから、結局において、正善を追求し、そして不正善乃至惡を避けることは、將來、ますますその一般的傾向と爲らないことを得ない。かくの如き時代に至れば、知識は、全く正善の目的に仕へる。

知識は、ここに至つて意識的に且自覺的に、社會の總體の者の生々發達に利用せられなければならない。

さて、知識及び知識利用の實質の變遷が右の如くであるとすれば、將來社會の實質も、亦、その大體においてこれを察知するに難くない。今その大體の中で主要な實質を語つても、

(一) 將來社會においては、知識が格段に進歩し、且知識利用が正善の目的に仕へるから、少くとも全同主義社會の最初の段階としての正義社會において、早くも(イ)技術が進歩し、經營が合理化せられ、企業が大規模に統合せられて、生産が豊富と爲り、人々は、その配給を潤澤に受けて、もはやその肉體生存乃至生活には、何ら不足を感じないやうになるであらうし、(ロ)これとともに、監視が強化し且普及し、理由のない物の占取や人の抑壓は許されず、搾取は否定せられて、人々は、その人格の尊嚴を認められ、その分に従つて適當に働き、その働きに従つて適當に酬いられるに至るであらう。



(二) 尙、正義社會は、知力的權力が支配する時代であるから、生産の豊富と搾取の否定とが基調と爲つて、人と人とは、正當な對立的關係に置かれるのであるが、それが進んで友愛社會に至れば、そこでは知力が徳力と合一して支配する時代であるから、人々は、一は他を抱擁する仕方において正當な關係を有ち得るやうになり、更に進んで同和社會に至れば、そこには徳力的權力が支配するから、人と人とは、自他を分たない無差別情況においてその正當な關係を保持し得るに至るであらう。法律・道徳・及び宗教の淵源は古いが、しかし、法律は、正義社會に至つて完全に行はれてその機能を止め、道徳は、友愛社會に至つて完全にその機能を發揮して、その役割を終へ、そして宗教は、同和社會に至つて完全に行はれ、その機能を永劫に續けるであらう。

以上、私は、知識及び知識利用の實質の變遷への關聯において社會の實質の變遷を明かにしたが、將來の全同主義社會、殊にその最初の段階における正義社會において、社會における諸問題、殊に民族問題・階級問題・及び國家問題が、知識人の

手に依つて解決せられることは、もはや自明であらう。もちろんかうしたことの望ましい社會の發達に合適し、又社會の總體の生々發達のために望ましい効果を與へることは、贅言するまでもなく、人々の容易に認めるところであらうと思ふ。

#### □ 問題の實質の變遷と知識階層

社會における諸問題、なかんづくこの書で眼中にせられる民族問題・階級問題・及び國家問題の實質の變遷に關しては、次ぎのことがいはれ得る。

(イ) 社會における諸問題の中で、民族問題・階級問題・及び國家問題が最も重大であることに關しては、既に前にこれをいうたが、これらの三の問題の中では、國家問題が最も重大である。

歴史を通觀するに、社會における大事件の勃發を促す原因は、民族問題・階級問題・資源問題・及び人口問題の四に存する。これらの中で、前二問題即ち民族問題及び階級問題よりも、後二問題即ち資源問題及び人口問題は、人類乃至社會に一層重大な影響を及すものである。けだし、前二問題は、いはばよく生きることに關す



るものであるに反して、後二問題は、いはば生きることに関するものであり、しかもその際、生きることに關する問題は、よく生きることに関する問題よりも、一層人類にとり、社會にとつて、切實であるからである。(拙著、日本と新國際主義、参照)。

資源問題及び人口問題は、通常、資源と人口との權衡の問題として發生する場合に、更に一層重大な意義を加へるが、この資源と人口との權衡は、常にほぼ國家の範圍において得られる(拙著、前掲、参照)。そこで、國家問題は、民族問題乃至階級問題よりも、人類乃至社會にとつて、一層重大であるといふ右述の結論が抽出せられ得るのである。實際、歴史に徴するに、國家問題は、いつの時代、いつこの場所においても、常に民族問題乃至階級問題よりも重大な意義を有した。國家問題が一度發生しさえすれば、民族問題乃至階級問題は、常に輿論の舞臺より退場する。(ロ) 民族問題・階級問題・及び國家問題が、社會における諸問題の中で、その發生する人的乃至物的地盤の範圍において、最も廣大であることは、もとより疑は

れ得ないが、これらの三の問題の中では、國家問題は、最も廣大である。尤も過去においては、民族問題が、その發生する地盤の廣袤において最も大であつたことは、認められなければならないが、しかし、少くともその廣袤を大にする速度においては、國家問題は、常に最大である。

國家問題がかうであることの理由は、一に繋つて次ぎの點に存する。けだし、民族も、階級も、或は血縁乃至文化などの同一、又或は身分乃至財産などの異別の如き自然的乃至人爲的制約に服するから、その範圍の擴大は、たとひ存しても、極めて遅々たるものであるに反して、國家の範圍は、關係諸國家の意圖に依つて、容易に擴大せられ得ることは、即ちこれである。

國家の範圍は、古來、その擴大を續けて來たが、それが將來ますます顯著に擴大して、やがて、地球上に數個の大國家を現出し、そして究極において極大二國家に歸趨して行くことに關しては、私は、嘗つて他の機會においてこれを述べた(拙著、日本と新國際主義、及び殊に國際社會の將來と新國際主義、参照)。國家の範圍の擴



大は、關係諸國家の意思に依るとはいふものの、この意思是、主として交通の發達に基づく經濟關係の緊密化・利害の共同化などの必至的原因に由來するものであるから、國家の範圍の擴大そのものも、亦必然的で、決して回避せられ得ない。

かくて、國家問題の發生する地盤の廣袤が、民族問題乃至階級問題のそれよりも一層大と爲つたのは、もちろん、地球上の各地域においてその時期を異にしてゐる。けれども、將來は、右の次第で、前の問題は、必ず後の二の問題のいづれをもその中に包容するに至るから、將來、地球上に數大國家殊に極大二國家が對峙して存するに至れば、民族問題乃至階級問題は、常に國家の人的乃至物的地盤の範圍内において惹起せられ、その外に互ることが少いであらう。

さて、以上の二の解明に關聯して、次ぎの二の副貳的原理がここに指摘せられなければならぬ。(イ)民族問題・階級問題・及び國家問題は、それぞれ別個の問題であるから、おのおの獨立してその影響を社會に及すものであること、(ロ)及び民族問題・階級問題・及び國家問題が、相互に合流するときには、單獨に存する場合よ

りも強い影響を、背離するときには右の場合よりも弱い影響を、社會に及すことは、即ちこれである。そこで、必然的に次ぎの結論が生ずる——『一の國家の範圍内において民族問題乃至階級問題が存する場合には、そこには國家問題が發生しにく、たとひこの問題が他國家との關係において發生したとしても、民族問題乃至階級問題と合流しない限り、その影響の強大性は、著しく弱められる。』

將來社會においては、既に右に論究せられたところに従つて、國家の範圍が著しく擴大し、従つてその範圍外に互つて民族乃至階級の對立することは、恐らくはなからうから、國家的對立に依つて生ずる國家問題に關して、民族問題乃至階級問題がそれと合流することは、多分、稀であらう。だから、今日はともかくとして、將來においては、民族問題乃至階級問題は、國家の範圍において發生し、原則として國家問題の社會に及す影響を弱める機能を爲すに至らなければならぬ。しかるに、かくの如きは、國家にとつて亦、社會にとつても、常に必ずしも望しいことではない。そこで、國家は、この場合には、多分、國家問題の重大性を顯著に發



揚する方法を採る必要がある。國家問題が國內問題である場合にもさうであるが、それが國際問題である場合には、尙更さうである。

もちろん、この場合には、既に前に知られたやうに、國家問題が、國內の民族問題乃至階級問題を退陣せしめるだけの強力性を有つてゐる譯ではあるが、しかし、それでも、國家は、その興亡隆替に關する自己自身の大問題を合目的乃至有利に解決するためには、國家問題の重大性を顯著に發揚する方法を用ひなければならぬのであり、そしてこのことは、論證を俟つまでもなく、自明であると思ふ。

國家が、國內の民族問題乃至階級問題を抑へて、國家問題の重大性を發揚する方法は、種々であり得よう。理由の有無に拘らず、權力に依つてこれを鎮壓することも可能であり、又利益を與へてこれを解消せしめることも可能である。これらの方法は、平素とは異なつて、國家問題の存する場合には、極めて容易に且效果的に行はれ得るべく、そしてそれ故に、從來、慣用せられたものに屬する。けれども、かくの如き方法は、今日までは別として、將來は、正義社會が實現し、知力的權力が支

配するから、漸次に行はれがたいものとなるであらう。だから、今日もさうであるが、將來においては殊に、最良の方法は、國家問題の解決の重大性を示し、そしてそのために民族問題乃至階級問題の解決を後にすることの正當性を語るべき根據を發見し、且これを一般に知らしめることでなければならぬ。しかも、この方法は、知識人の存在を前提しなければ、決して可能でない。

かくて、將來社會においては、問題の實質の變遷に應じて、その解決に、ますます、知識人が必要とせられるに至るであらう。國家問題を合目的乃至有利に解決するために、國家が、國內の民族問題乃至階級問題を權力に依つて鎮壓し、利益を與へて解消せしめる場合においても、その方法の實施に知識人の存在が必須とせられる。いはんや、その他の方法の實施においてをやである。しかも以上は、國家問題の解決を國內的方面への關聯においていつたが、これを國際的方面への關聯においていふ場合には、尙更さうである。民族問題・階級問題・否實に國家問題の如き複雑且巨大な問題を知識人の手に依つて解決することは、あらゆる方面において、



社會の望しい發達に合適し、且その總體の者の生々發達に望しい効果を與へる。

ところで、私がかういふ結論を導き出したときに、極めて注意深い人々は、或は次ぎのやうに考へるかも知れない。『民族問題・階級問題・及び國家問題の如き世界的問題を知識階層の人々に依つて解決することの社會の發達に合適してゐることは、以上の解明で充分である。けれども、その望しいこと、殊にその社會の總體の者の生々發達に役立つことは、以上の解明では、未だ充分に明確にせられてゐない』と。私は、さう疑ふ人々のために、補充的に、尙次ぎの解明を爲したい。『知識は、その本質上、妥當する知識でなければならぬ。妥當する知識は、これを眞の知識といひ、そして知識の妥當は、これを眞理といふ。』

知識は、又その目的上、社會の總體の者の生々發達を促進するために利用せられなければならない。社會の總體の者の生々發達を促進するために知識を利用することは、これを眞の知識利用といひ、そして社會の總體の者の生々發達を促進するこ

とは、これを理想の實現といふ。

知識は、眞理でなければ、その用を爲さないし、知識の利用は、理想の實現でなければ、人類の生存乃至生活を危くする。

人類の生存乃至生活を危くしてよいといふ知識は、決して妥當な知識でないから、理想の實現に利用せられ得ない知識は、決して眞理でない。だから、眞理である知識は、必ず理想の實現のために利用せられ、従つて社會の總體の者の生々發達を促進するに適する。

眞理は、一朝にして得られがたく、只社會の發達があつて、それは、はじめて全面的に得られるに過ぎない。全同主義社會の最初の段階に屬する正義社會の時代、乃至は社會に極大二國家が對立する時代は、まさにその眞理が全面的に得られた時期に屬するであらうから、その時代において、民族問題・階級問題・及び國家問題が知識階層の人々に依つて解決せられることは、もちろん、社會の總體の者の生々發達を促進する。』



#### 四 現在社會の特質と知識階層

知識階層の人々の民族問題・階級問題・及び國家問題を解決することが、望ましい社會の發達に合適し、且社會の總體の者の生々發達に望ましい効果を有つことに關しては、既に私は、上來、これを論述したが、その際、私は最も顯著な事例に依る論證を欲して、極大二國家對立時代や、正義社會時代の如き遠い將來について語つたために、人は、或は、遠い將來は別として、現在乃至近い將來においては、さういはれ得ないと考へるかも知れない。けれども、事實は、決してさうではない。極大二國家の對立時代の現出は、もちろん、悠遠の未來に屬し、正義社會時代の現出も、その完全情況を豫想する限り、もとより、亦悠久の未來に屬する。けれども、これらの時代において行はれるであらうことと同様のことは、現在乃至近い將來においても、亦行はれ得なければならぬ。

(一) 極大國家の出現以前に數大國家が地球上に出現することに關しては、既に

私は、前にこれをいうた。今日は、もちろんその時代ではないが、しかし、現在國家も、過去の小國家の統一の結果であり、既に相當の大國家であるから、國家内に民族問題乃至階級問題を内含してゐるものが少くなく、殊に今日は、變革期であり、いはゆる世界の再分割の行はれようとする時代であるから、近い將來において現在の數多の國家が聯合し、乃至合併して、右の數大國家の出現を馴致することは、けだし、疑はれ得ない。だから、もし國家の範圍の擴大が、國家問題を解決することに依つて、民族問題乃至階級問題の解決をも容易にし、社會の總體の者の生々發達に寄與することを意義するなら、これは、遠い將來を待たなくとも、既に今日においても現實の事實であり、そして近い將來においては、尙更顯著に、現實の事實として示現するに至るであらう。即ち、民族問題・階級問題・否殊に時とともに巨大且複雑となる國家問題が、知識人の手に依つて解決せられることは、啻に遠い將來においてのみでなく、既に今日において、乃至は近い將來においても、必然であり且望ましいといはれなければならない。



(二) 正義社會が全同主義社會の最初の段階であり、そしてそれが資本主義社會の後に來るものであることに關しては、前に私は、これをいうた。資本主義社會は、封建社會の後に來つたものである。ところで、全同主義社會は、既に前に知られたやうに、それにおいて支配する指導理念の變遷に従つて、正義社會・友愛社會、及び同和社會の三に分けられ得るが、これと同様に、資本主義社會及び封建社會も、それにおいて支配した指導理念に従つて特徴づけられ、前者は、自由社會といはれ得るべく、そして後者は、それ以前の一定社會とともに、秩序社會であるといはれ得る。秩序社會たる封建社會が自由社會たる資本主義社會へ移行する過渡期に、強權社會が現出したが、これと同様に、自由社會が正義社會へ移行する過渡期にも、統制社會が現出する。現代は、まさしくこの統制社會の初期にあると見られ得る。統制社會は、正義社會への前段階として存するものであるから、それにおいては、その正義社會を準備する特質に相應しく、一方においては、技術が進歩し、企業が大規模化し、そして他方においては、監視が強化せられ、正義を實現するための施

設が綿密化する。そこに知識人の需要が存することは、論を俟たない。それが知識人に依つて指導せられることの望しいことも、亦恐らくは、贅言するを須みない。元來、統制社會は、社會における各般の事業乃至事物(人・物・貨幣)に調整を與へ、機能を統合し、効率を高めようとする社會であり、そしてそれにあつては、例へば國家が、消極的には、例へば産業の無政府主義的生産を防ぎ、國論の分裂を避け、積極的には、例へば特定産業を奨励し、特定思想を布及するなど、いはゆる統制手段に依つて國力を高める。國力を高めるために統制手段を用ひることは、過去においても或範圍乃至或程度において行はれたが、それが全面的に全範圍に互つて行はれるに至つたのは、今日に初る。けだし、過去においては、その産業情況もしくは交通情況などの理由より、統制を行ふことは、全く不可能であり、従つて又思ひも寄らないことであつたが、今日においては、それは、漸く可能となり、従つて行へば行はれ得るに至つたに依る。かくて、今日以後の社會は、現實に統制社會と爲つた。今日以後の社會が統制社會であり、そして從來の社會がこれであり得な



つたのは、社會の發達が過去において不可能であつたものを今日において可能ならしめたために外ならない。

統制社會において、知識人が從來よりも一層重大な役割を營むことはもとよりいふを俟たないが、更に一步を進めてこれをいへば、統制社會においては、正義社會におけるよりも、或範圍においては、一層多く知識人を需要することがいはれ得なければならぬ。例へば、正義社會において知識人が活動する程度は、統制社會においてかれらが活動するとは、もちろん同一の比でなく大であるが、しかし、後者においては、制規を知る知識人が需要せられるに反して、前者においては、その需要がないといふが如きことは、即ちそれである。制規とは、國家その他の公共團體の發布した規則をいふ。ところで、かくの如き規則即ち制規があれば、これを制定しもしくは運用するために、知識人が必要であり、そして知識人がそれに與ることの望しいことは、疑ひを容れない。

正義社會は、既に前に言及せられたやうに、法律の完全に行はれる社會であるが、

統制社會は、それへの準備として制規の氾濫する社會である。

いはゆる法律は、それに關して種々の誤解があるが、決して制規と自同ではない。それは、道德と等しく、社會の人々が「佳い」と考へて必ず従はなければならないとする意識、即ち必從的社會的規範意識の一種である。但し、道德が獨自律で、行為者の内心の規制を主とするに反して、法律は、相互律で、人々の間の外部的な行為關係の規制を主とする。即ち法律は、社會的規範意識の一種であるからそれは——例へば道德がさうであるやうに——必ずしも、物に書き示されることを必要としない。社會におのづから發生し、且成育する。だから、それは、もちろん、制規を基礎としても成立するが、又、慣行を基礎としても成立し、更に或は輿論を背景として成立し、又或は世間の思惑を顧慮する叡智に依つても成立する。ところで、正義社會において行はれる法律は、多分、この最後のものに依つて成立するものが多く、それが制規乃至慣行を基礎として成立することは、たとひ絶無でないとしても、比較的に少いであらう。なぜなら、統制社會においては、現に今日においても



制規が氾濫し、そして將來ますますその氾濫を續けるが、しかし、それがかくて正義社會に立入れれば、人々は、統制社會時代に受けた制規の訓練に依つて、習ひおのづから性と爲り、制規がなくとも法律に従つて行動し、従つて制規の存在を必要としないであらうからである。即ち統制社會においては、制規が氾濫するに反して、正義社會には、このことがない。だから、制規に關する限りにおいては、前の社會においては、後の社會におけるよりも、知識人を需要することは、遙かに大であるといはれなければならない。

統制社會において、知識人の需要が大であるといふことは、知識人が今日の社會において既に重大な役割を果しつつあるといふことである。けれども、知識人が今日の社會において重大な役割を營むことは、尙、別の方面からいはれ得る。

誰もが認めるであらうやうに、今日は、統制社會の初期であり、そして社會の轉形期に屬する。それは、數個の既存の國家が結合して、新たな大領域國家を現出する過程にあるものとしての變革期であり、又資本主義社會としての自由社會から全

同主義社會としての正義社會へ移行する道程にあるものとしての過渡期である。社會の轉形は、歴史以前の久遠の過去から、今日までを含めて考へても、必ずしも數多く存したといはれ得ないが、今日の社會の轉形は、その少い事例の中でも最も顯著なものに屬すると爲され得よう。

すべて變革期には、局面打開のために、強力な、手荒な手段が用ひられ易く、そして過渡期には、現實即應のために、早急な、間に合はせの處置が採られ易い。この時期において、知識人の活躍することは、これらの手段乃至處置から生ずる過誤を幾分か軽くすることに役立つなければならない。のみならず、かくの如き時期即ち社會の轉形期には、權力が強化せられ、干渉が細密化せられて、人々の生活は、全面的に、國家の監視に置かれる。この時期において、知識人の活躍することは、右の權力乃至干渉を合目的化することにも、役立つものでなければならぬ。



## 五 知識階層の役割とその團結

社會における諸問題、なかんづく民族問題・階級問題・國家問題などの解決は、社會を住みよくするために絶対に必要である。

社會を住みよくすることは、人々をして生きがひある生存乃至生活を営ましめるために不可欠的に必要である。人々をして生きがひある生存乃至生活を営ましめるといふことは、人々をして人生目的を實現せしめること、即ち社會の總體の者をしてその生々發達を遂げしめることである。かくて、民族問題・階級問題・國家問題などの解決は、社會の總體の者の生々發達を遂げることのために絶対に必要である。

既に上來見られたやうに、民族問題・階級問題・及び國家問題の解決は、知識階層に依つてのみ可能であり、又これに委せられることが、必然であり且望しい。知識階層に屬する人々でなければ、これらの問題の解決の方法を發見することができない。知識階層に屬する人々でなければ、これらの問題の解決の努力に指導を與へ

ることができない。即ちかれらでなければ、これらの問題を解決することができない。そのこれをよく解決し得ないことは、もちろんのことである。そこで、かれらは、これらの問題を解決すべき使命を有つ。この使命が社會の總體の者の生々發達を遂げる上に重大な意義を有することは、もとより、當然である。

かくて、知識階層は、社會において、これらの問題が存する限りにおいて、いかなる時代においても、重大な役割を有つ。

極大二國家對立時代及び正義社會時代に比すれば、今日乃至近い將來においては、知識人の社會において營む役割は、尙、未だ重且大であるといはれ得ないかも知れない。けれども、既に今日においても、知識人の社會において營む役割は、相當に重且大である。このことは、既に私は、上來、確證し了へた積りである。極大二國家の對立時代の出現は、もちろん、悠久の未來に屬し、又正義社會時代の出現も——そこに法律が完全に行はれ、そして人々の生存及び生活が完全に保障せられることを前提する限り——悠遠の未來に屬する。けれども、知識人は、必ずしもこれら



の時代の出現を俟つて、社會に重大な役割を營むに至るのではなくして、今日の國家的情況乃至統制社會において、既に重大な役割を營む。このことは、以上に依つて、理解せられ得ると思ふ。

知識階層の人々が、既に今日において、社會において重大な役割を營みつつあることは、決して單なる推定ではなくして、却つて赤裸々の事實である。この事實は、特に物々しく統計を示すまでもなく、何人も、注意しさをすれば、容易に氣が付くところであるに拘らず、しかも、それが遂に人々の確認にまで高められてゐないのは、眞に不可思議な現象である。これは、畢竟するに、事實の不知でなくして、事實を理解する理論の不知に由來するものであらう。

それにしても、私は思ふ——『知識階層が民族問題・階級問題・及び國家問題の解決の任に當ることは、必然の現實であり、そしてそれが、將來ますます著大な現象と爲るのみでなく、現在においても既に著大な現象であるに拘らず、尙人々が、この階層の没落をいふほどに、右の必然の現實に氣が付かないのは、或はこの階層

に屬する人々が、そのこれに屬する資格、即ち知識人たる資格において、通常、團結しないことに、基くのではなからうか』と。

知識階層に屬する人々がその知識人たる資格において團結しないといふことは、極めて多くの人々が不用意に想定するやうに、決して學者・藝術家・評論家など、もしくは辯護士・計理士・技師・醫師などが團結しないといふ意味ではない。けだし、これらの人々は、假りに知識人の典型的な者に屬するとしても、決してそのすべてではなく、又假りに團結することがないとしても、それは、知識人の資格においてでなく、職業人の資格において團結しないのであるからである。

學者・藝術家・教育者・評論家など、もしくは辯護士・計理士・技師・醫師などは、たとへば、商人・農夫・大工・石工など、もしくは政治家・企業家・經營者・労働者などと等しく、繼續的にその名の示す業務に従事して生存乃至生活する限り、職業人に外ならない。只後一群の人が運用學的乃至實際的知識を必要とし、往々にして専門的教育に依らなくとも間に合ふに反して、前一群の人々は、純正學的乃至



理論的知識を必要とし、通常、専門的教育を受けることを必須とするから、特に知識階級を代表するやうな外観を呈するに過ぎない。そこで後一群の人々が時に知識階層に属しないことがあるに反して、前一群の人々は、常に必ずこの階層に属するといはれ得るであらう。けれども、知識階層をかれらのみに限つて考へるなら、それは、もちろん、誤謬である。

職業人としての資格における學者・藝術家・教育者・評論家など、もしくは辯護士・計理士・技師・醫師なども、職業人としての資格における商人・農夫・大工・石工など、もしくは政治家・企業家・經營者・労働者などと同様に、しばしば團結する。このことは、現實の事實として、何人もこれを認めないことを得ないであらう。にも拘らず、人々が、往々にして、前一群の人々を團結し得ないと考へ、そして後一群の人々を大いに團結し得ると考へるのは、その間に思惟の混亂に基づく標準の漂流が存すると、私は思ふ。前者を知識階層として考へ、後者を有産階級乃至無産階級として考へることは、即ちこれである。もし兩者を職業人として考へ、そして

それでも前一群の人々が、後一群の人々よりも、團結することが少く、もしくは團結しても、その範圍が小さく、團結力が乏しいとせられ得るなら、それは、全くかれらの數が比較的に少いか、もしくは團結する必要が比較的に少いかに依る。いづれにせよ、それは、かれらの職業上の事由に由來するもので、決してかれらが知識階層に屬することに由來するものではない。だから、假りにかれらが全く團結することがないとしても、これをもつて知識階層の人々が知識人たる資格において通常團結しないと爲すことは、もちろん、誤謬である、かれらは、決して知識階層の全部ではない。かれらは、假りに團結しなくとも、職業人たる資格において團結しないのであり、決して知識人たる資格において團結しないのではない。

知識階層の人々が知識人たる資格において通常團結しないといふことは、一に全く、かれらはこの資格においては通常團結する必要がないことに由來する。知識階層は、非知識階層に、知識人は、非知識人に對立する。非知識人は、知識人の敵でなく、非知識階層は、知識階層と争ふことを欲しない。だから、知識人乃至知識階



層は、少くともその資格乃至地位においては、非知識人乃至非知識階層に對して自己を守る必要がない。かくて、たとへば、知識向上の目的、乃至は相互の和樂増進の目的において、多少の團結が、知識階層に屬する人々の間に生ずることがあつても、しかし、たとへば、無産階級に屬する人々が有産階級の人々に對して爲すやうな強力な團結は、決してかれらの間に生じない。もちろん、知識階層に屬する人々でも、たとへば、嘗つて儒書を焼き、儒生を坑にしたやうな暴虐が加へられる場合には、これに對して團結を爲すこともあらう。しかし、かくの如きことは、例外的であり、且持續的のことであり得ない。だから、かれらの知識人たる資格においては、團結は、通常、存しないのであり、又假りにそれが存したとしても、多くは、通常の意味における同心協力以上の何物でもあり得ない。

知識階層の人々は、かくて、知識人たる資格においては、通常、團結しない。しかるに、もしこのことが果して承認せられるべきものであるなら、一般に團結がなければ強力性を生じ得ないから、かれらの強力性は、論理的に立證せられ得ない。

知識人が將來ますます社會において重大な役割を營み、民族問題・階級問題・及び國家問題の解決の任に當ることがいはれ得ても、否、かれらが、既に今日において社會において重大な役割を營み、これらの諸問題の解決の任に當つてゐることが事實であつても、かれらの強力性は、少くとも論理的には、立證せられ得ない。この點は、果してどうであらうか？

問はれるまでもなく、それは、まさにその論理の歸結が示すやうに、その通りである。けれども、知識階層に屬する人々は、たとひ知識人たる資格において團結しなくとも、何かの民族、何かの階級、又何かの國家に屬するから、これらのそれぞれのものに屬する資格、約言すれば民族人・階級人・乃至國家人たる資格において、或は民族問題、或は階級問題、更に或は國家問題の解決のために團結する。しかも、かれらは、これらの團結において常に指導的地位に立つ。だから、かれらは、たとひ知識人として特別に強力性を贏得しないとしても、決してそのために弱力であるとはいはれ得ない。



民族問題・階級問題、もしくは國家問題の解決において、知識人は、非知識人よりも、言論に長ずるが實行的でなく、熟慮はするが果斷でなく、従つて行動に勇氣がなく、機宜を失するかも知れないし、そして又これらの缺陷の暴露において、その信望を傷つけるかも知れない。けれども、これは、もとより大なる意義を有ち得ない。けだし、知識人に缺陷があるなら、又非知識人にも缺陷があり、従つて單に右の點のみからして、知識人が非知識人よりも劣るとはいはれ得ないのみではなく、既に上來見られたところに従へば、知識人が、前掲の問題の解決において非知識人と團結し、そして、この團結において指導的地位を得ることは、確實であるからである。

知識階層の人々はかくて、決して弱力ではない。けだし、かれらは、知識人として團結することが少くとも、常に他の資格において團結して、その強力性を得るからである。かれらが、將來、没落するどころか、優越化する階層に屬するものであることは、既に前にこれをいうた通りである。

## 六 社會に於ける最大の問題の解決と知識階層の奮起

### イ 國家問題の解決と知識階層の團結

知識階層の人々が民族問題・階級問題・乃至國家問題の解決のために團結し、そしてこれにおいて指導的地位を有つことは、社會の總體の者の生々發達のために極めて望ましい。殊に既に前に知られたところに従へば、民族問題乃至階級問題よりも、國家問題は、社會の發達とともに漸次に巨大化して行くから、知識階層に屬する人が、これとともに漸次に、民族乃至階級の範圍においてよりは、國家の範圍において團結し、そしてこれにおいて指導的地位を有つに至るなら、これは、社會の總體の者の生々發達にとつて一層望ましいことである。このことに關しても、私は、既に前にこれを論證したへた。

知識階層に屬する人々が民族乃至階級の範圍において團結するよりも、國家の範圍において團結することは、かれらにとつても極めて自然であり、且かれらの使命



を果す上においても、甚だ效果的である。なぜなら、かれらが民族乃至階級の範囲において團結する場合には、民族乃至階級が一定社會に混在する限り、かれらもそれに従つてその社會において離隔せられるが、これに反して國家の範囲において團結する場合には、國家は一定社會に唯一的であるから、かれらは、他の社會に對する關係においては別として、少くともその社會においては、相互に分絶せられることがないからである。

#### □ 國家問題の解決と正善の實現の要求

(一) 知識人の國家人たる資格における團結と知識の國境性

知識階層に屬する人々が國家の範囲において團結するといふことは、將來においてますます顯著と爲るが、しかし、それは、既に今日においても現實のしかも顯著な事實である。

知識階層の人々が國家の範囲において團結するのは、知識人たる資格においてでなく、國家人たる資格においてこれを爲すのである。現にその團結がかれらのみで

なく非知識人をも包含することは、これを立證する。かくて、かれらのこの團結における行動は、少くとも第一次的には、國家の立場において爲される。只かれらは、國家人として團結しても、本來、知識人であるから、更にこれに附隨して、第二次的に、知識の本質に従ふ立場、即ち眞理の觀點から、行動しようと努力するに過ぎない。

知識階層の人々が國家人として國家の立場において行動する場合には、かれらは、國家の利益を高調する。これは、かれらが、民族人乃至階級人として民族の立場乃至階級の立場において行動する場合に、民族の利益乃至階級の利益を高調すると、全く等しい。しかも、かれらは、本來、知識人であるから、その資格において國家の利益を高調するには、この國家の利益の高調が眞理の觀點からは認せられるものであることを要望する。しかるに、この國家の利益は、社會發達の程度に應じ且は當該國家の特質に従つて、或は小利乃至自利であることがあり、又或は大利乃至他利であることがある。いづれにせよ、その追求が正善であれば、かれらは、眞理の



觀點からして満足し得るが、さうでなければ、満足し得ない。そこで、かれらは、國家問題の解決のために、或は國內的に民族乃至階級などに對し、又或は國際的に他の國家その他に對して、自己の國家の利益を高調し、そしてこれを追求する場合には、或は意識的に、又或は無意識的に、それが正善であるとの認識を得ようと努める。知識の國家性乃至國境性は、かくの如くにして生ずる。

(二) 知識の國境性と知識人の正善の實現に對する熱情

知識の國家性乃至國境性は、必ずしも常に知識の歪曲を意義しない。かくて右の場合にも知識階層の人々の追求する當該國家の利益が眞理の觀點からして容認せられ得るものなら、これはもちろん歪曲せられた知識ではない。けれどもそれがもしさうでないならこれは、全く歪曲せられた知識として残る。歪曲せられた知識は虚偽であるから、常に實踐に支障を與へるか、でなければ惡結果を生じて、それに則る者に不利を與へる。即ち歪曲せられた知識は、常にその虚偽性を暴露する弱點を有つから、これを形成する人々に依つても、これに則ることを喜ばれない。

知識階層の人々は、眞理を愛好し、正善の實現に熱情を感じる。これは この階層の人々の特質でなければならぬ。だから、かれらは、國家問題を論議する場合に、たとひ自らは、知識の歪曲を試み、従つてその論議が、常に國家的特色を擔ふのみでなく、國家的僻見を有つことがあるとしても、しかし、他の者の論議にこの僻見があつて、知識の歪曲が認められる場合には、少くとも良心的にこれを受入れない。かくて、次ぎの原則が、ここに成立する。知識階層の人々が國家の利益を追求する場合にも、もしその利益が眞理の觀點から容認せられ、従つて追求する行爲が正善であるときには、團結の力を鞏うするが、さうでないときには、これを弱めるといふことは、即ちこれである。

知識の國家性乃至國境性は、必ずしも常に知識の歪曲を意義しないとしても、知識階層の人々が國家問題の解決のために國家的範圍において團結してその所屬する國家の利益を追求する場合に、この追求が正善であることは、今日、尙(極めて特殊な國家を除いては)、只例外的に認められ得るに過ぎないと思ふ。だから、今もし



知識階層の人々が、その所屬國家の利益を追求して、その追求が正善であることをいうても、少くとも一應は、それは、意識的乃至無意識的に歪曲せられた知識に由来すると推定せられるべきであるかも知れない、けれども、それにも拘らず、國家の利益の追求が正善であることは、もちろん、論理的にも不可能でなく、又事實的にも存し得る。それは、今日においても、特定の國家においては、現實の事實であるのみでなく、將來においては、あらゆる國家において、現實の事實と爲るに至るであらう。(この後の點に關しては、私は、既に前にこれをいうた)。かくの如き場合に、知識人が、所屬國家の利益の追求の正善であるをいふのは、たとひ一應誤解せられる可能性があるとしても、もとより廢せられ得ない。けだし、もし一の國家の利益の追求が眞に正善であるなら、これは右に知られた原則に従つて、その國家の團結を強くするのみでなく、更に進んで、もしすべての國家の利益の追求が眞に正善を目的とするものであるなら、たとひ對立國家のそれぞれの強い團結があつても、國家問題の解決は、常に平和的に且合目的に爲され得るからである。

思ふに、知識階層の人々が國家の利益の追求のために國家の範圍において團結することは、國家の存續する限り、もちろん、永遠に續くであらう。けれども、特定の國家において、國家の利益の追求が、そのままに正善であり、もしくは將來社會において、あらゆる國家の利益の追求が正善であるに至れば、かれらは、國家の利益の追求のために團結するといはれるよりは、むしろ、正善を實現するために國家の範圍において團結するといはれ得る情況において行動し、乃至行動するに至るであらう。といふのは、かれらは、苟くも知識に依つて立つ以上—そしてその知識は、本來、妥當するものでなければならぬものである以上—おのづから眞理を愛好し、従つて又正善の實現を確實にしたいといふ意氣に燃えるから、又おのづから、正善の實現を主として、國家の利益の追求をこれに合致せしめることを考へるに至るであらうからである。知識階層の人々が、かくて、もし右の情況において行動するに至れば、かれらは、たとひ國家の利益の追求のために團結したのであつても、その實質において、正善の實現のために團結したと毫末も變るところがない。



## (三) 正善の實現と知識人の知識人たる資格における團結

知識階層の人々が眞理を愛好し、正善の實現を確實にするために團結することは、今日も、或範圍においては既に存する。知識階層の人々は知識人たる資格において通常團結しないと、私は、前にこれをいつたが、しかし、これには唯一の例外がある。眞理を愛好して正善の實現を確實にするために團結することは、かれらが知識人たる資格において團結するその唯一の例外である。かれらのかくの如き團結は、今日、尙、限られた範圍において存するに止るが、しかし、かれらが、かくの如き事由に依つて團結するといふことは、實に社會にとつて、もしくは人生にとつて、偉大な事實である。だから、もしこれが、同時に特定の國家の特質上、國家の利益の追求にも役立つ、もしくは將來においてあらゆる國家の利益の追求にも役立つに至るなら、ここに、知識人たる資格においてのみでなく、國家人たる資格においても、衷心の欲求を満足し得るから、かれらの行動は、一層その華々しい光彩を加へ、そしてかれらの生きがひも、それに依つて一層深く感ぜられるであらう。

元來、知識階層の人々が國家問題の解決のために團結する場合に、それがかれらの國家人たる資格において爲されるなら、國家の利益の追求が第一義的であり、その際、これが果して正善であるか否かは、一應は問はれないが、これに反して、それがかれらの知識人たる資格において爲されるなら、正善の實現が第一義的であり、その際、國家の利益の追求が正善である故に認められるに過ぎない。國家人は、國家の利益に依つて動き、そして知識階層の人々も、國家人たる限りにおいて國家の利益に依つて動くが、しかし、知識人は、眞理を愛好し、正善の實現に對して熱情を感ずるから、國家問題の解決は、少くとも知識階層に屬する人々にとつては、それが正善の實現の要求に合し、しかも國家の利益の追求にも適すると信ぜられる場合に、最も多くかれらの感激を唆るものでなければならぬ。だから、國家問題の解決が正善の實現の要求に合する見込がありさへすれば、かれらの心は、おのづからこれを支持するに傾く。(かれらが他の國家に屬する者である場合においてすら、さうであるといはれ得る)。これに反して、それが正善の實現の要求に合する見込がな



い場合には、かれらの心は、これを非難するに傾く。(かれらが、その國家に屬する者であつても、尙さうであるといはれ得る)。もちろん、國家問題の解決は、それが正善の要求に合しても、又合しなくとも國家の利益を無視し得るものでなく、否、その利益の追求にも役立たなければならぬが、しかし、それが正善の實現の要求において爲された場合と、これにおいて爲されない場合に依つて、大なる相異の存することは、その際、認められなければならない。

知識階層の人々は、國家の存する限り、國家人として團結して、國家問題の解決に従事することは、必然であらう、且望しいが、しかし、それにしても、かれらがこの問題を知識人としての團結において解決することを得るなら、それは、かれらにとつて一大進展を意義するものである。

知識階層の人々が眞理を愛好し、正善の實現を要求することは、世上、正義とか人道とかが問題となり、多數人の幸福が問題と爲つたときなどに、かれらが奮起することがあるに徴しても知られる。かれらは、かくて、社會の總體の者の生々發達

に深い關心を有つ。かれらが國家の利益のために奮起することも、畢竟、この關心と無關係ではあり得ない。

知識階層の人々は、既に右に知られたやうに、將來はもちろんのこと、現在においても、國家問題の解決に専心する。しかもその際、かれらの追求する國家の利益が眞理に合適し、正善である場合に、かれらの心が最も善く躍るものであることは、かくて、以上の論證に依つて、もはや、疑はれ得ない。



## 七 知識階層の任務とその運動

### イ 國家問題の解決に關して有つ知識階層の任務

(一) 解決を正善の要求に合するやうに導くべき任務

國家問題の解決を正善の實現の要求に合するやうに導くこと、乃至は國家の利益の追求を正善ならしめるやうに導くことは、知識階層の人々の任務である。それは、かれらでなければ爲され得ない。だから、それは、かれらにとつて、まさしく當爲である。

知識階層の人々に對して、私が、右に、國家問題の解決を正善の實現の要求に合せしめる目的において團結するべきことをいつて、民族問題乃至階級問題の解決に言及しないのは、これらの問題を全く無視したのではない。これらの問題の解決に當つても、知識階層の人々がそれを正善の實現の要求に合せしめるやうに團結するべきは、もちろんのことである。けれども、既に前に見られたところに従へば、

(イ) 國家問題は、民族問題乃至階級問題よりも強力であり、且國家の範圍は、民族の範圍乃至階級の範圍よりも、一層、迅速に擴大する。そこで、國家問題の解決は、民族問題乃至階級問題よりも、一層、急務でなければならぬ。しかも、このことは、將來社會において、一層さうでなければならぬ。但し、國家問題の解決は、將來社會を考へるまでもなく、今日の社會において、既に極めて重要である。けだし、今日の時代は、もはや、民族問題乃至階級問題の時代ではなくして、既に國家問題の時代であるからである。

(ロ) 國家問題と民族問題乃至階級問題とは、別個の利害を基礎とする。そこで、國家の範圍が、擴大して民族乃至階級をその中に包含するに至つても、國家問題の解決は、民族問題乃至階級問題の存在に依つて不利にせられることがある。かくて、前者の解決のために、後者への顧慮が必然となり、従つて國家問題の最も善い解決は、おのづから、民族問題乃至階級問題をも、同時に最も善く解決するものでなければならぬこととなる。



だから、もし知識階層の人々が國家問題を正善の實現の要求に従つて解決するために團結するならば、これは、當然に民族問題乃至階級問題をも正善の實現の要求に従つて解決することに導くといはれなければならない。即ち、國家問題の解決は、すべての點において、正善の實現の要求を満足せしめ得るものであるから、従つて、社會の總體の者の生々發達を促進する上において、それは、先づ第一に試みられべきものでなければならぬ。

(二) 正善の要求に合することを内外に宣明すべき任務

國家問題の解決を正善の實現の要求に合するやうに導くこと、乃至は國家の利益の追求を正善であらしめるやうに導くことが、知識階層の人々の任務であり、當然であることを、私は、右にいつたが、もしこのことが果してさういはれ得るならば、國家問題の解決に當つて、國家の利益の追求が正善である場合に、これを内外に宣明することも、亦、知識階層の人々の任務であり、當然でなければならぬ。けれど、もしこのことが宣明せられれば、たとひ國家問題が直ちに解消しなくとも、そ

れは、平和的に且合目的に解決せられ易くなるからであり、そしてこのことを、宣明することは、かれらの得意とするところであり、かれらに依らないでは爲され得ないからである。

曩にもいつたやうに知識階層の人々は、知識人たる資格においては、通常、團結しない。これは、實に一の巨大な事實である。けれども、かれらは、この資格において、全く團結し得ないのではない。かれらが眞理を愛好し、正善のために團結することのあるのは、既に前にこれをいつた。だから、知識階層の人々は、國家問題の解決を正善の實現の要求に合せしめるために、團結するべきであり、そしてもし特定の國家においてその利益の追求が正善であるやうなことがあるなら、かれらは、この事實を内外に宣明するために團結するべきである。

但し、この最後のことに關しては、人々は、或はその宣明の必要を認めるが、そのために團結する必要を認めないかも知れない。けれども、

(イ) 知識階層の人々は、眞理を愛好するが、しかし、常に必ずしも迷妄を脱



却し得ない。そこで、かれらは、時としては意識的に、又時としては無意識的に、虚偽を眞理であると主張し、正善でないものを正善であると曲説することがある。かれらが知識人としての資格以外の資格において、別言すれば、例へば職業人として個々の乃至團結的に行動する場合に、往々にして小利乃至自利を企求し、權謀術數を弄することを厭はないことのあるのは、これを示す。

(ロ) 知識階層の人々は、一般に眞理の容易に發見せられ得ないことを知り、又眞理と思はれるものでも、往々にして虚偽であり得ることをも知つてゐる。そこで、かれらは、眞理の主張に關して詭辯の餘地があり得ることを知り、不正善も、言説の上では、これを聴く人の性格・能力・先入主などに依つて正善として妥當することを知り、殊に話す者に力がある場合には、一層さう爲され易いことを知る。かくて、かれらは、虚偽を眞理といひ、不正善を正善として曲説するにも、一應の理論陣を張り、容易にこれを崩壊せしめない。かれらが團結の力を借り、右の理論陣を眞理の名において擁護するに至つては、それは、もはや、人々

の個々の力では、全く難攻不落と爲る。

知識階層の人々は、議論が多い。かれらは、眞理を愛好し、又これに勝ち得ないことを知るから、眞理の名において行動する。けれども、かれらは、それに依つて私を去り、大同團結するよりは、むしろ、殊更に異を立て、對立することが多い。これは、實にかれらの有つ悲むべき弊である。殊にかれらが、その際、その迷妄からして私意・恣意を逞しうし、意識的乃至無意識的に虚偽を眞理であると主張し、不正善を正善であると曲説し、そのために團結して他と對立するに至つては、殆んど沙汰の限りでない。もちろん、かくの如き場合においても、かれらに對する正當な方法は、決して抑壓でなく、議論に依らなければならず、そしてこの議論は、虚偽を排して眞理を彰し、不正善を斥けて正善を確めるために爲されるが、しかし、その場合に、これを團結に依らないで個々のに行つては、百年河清を俟つと等しい。もし人々がこれを永遠の將來まで續ければ、正は非に勝つから、勝つといふその目的は、もちろん遂に達成せられるであらう。けれども、それでは、當面のことには



何らも役立つたない。かくて、社會においては、急速に異論を訂し、謬説を改める必要は、常に存する。しかも、これを訂し、改めるためには、これを爲す者の側において、團結することが望しい。このことは、いかなる種類の事項に關してもさういはれ得る。況んや、事が國家問題の如き社會の總體の者の生々發達に重大な影響を有つものである場合においてをや。だから、もし特定の國家が國家問題の解決正善の實現の要求に合せしめる事實があるなら、人々がこれを内外に宣明するために努力することは、もちろん望しいことでなければならぬ。

思ふに、不正善を正善とし、虚偽を眞理であると爲すことは、將來の社會においては、多分、稀少化して行くであらう。けれど、社會の進歩と人類の向上とに依つて、曲説は、懷抱せられにくくなり、形成せられる必要もなくなるからであり、切言すれば、虚偽を眞理であると爲し、不正善を正善とすることは、これを曲説してもその曲説が暴露せられ、しかもその暴露せられることに依つて、曲説する者が不利を受けるからである。けれども、今日の社會においては、その發達の段階が充分

でないから、未だかくの如きことは、期待せられ得ない。そこで、國家問題の如き社會における最大の問題の解決に當つては、これを正善の實現の要求に合せしめるためにも、又特定國家がこの努力を爲しつつある事實を宣明するためにも、知識階層の人々の團結の必要であることが、正當に結論せられる。

#### □ 知識階層の運動と社會の總體の者の生々發達

かくて、知識階層の人々は、國家問題の解決を正善の實現の要求に合せしめるために團結するべきであり、そしてもし特定の國家が國家問題の解決を正善の實現の要求に合せしめてゐる事實が存するなら、かれらは、この事實を内外に宣明するために團結するべきである。

知識階層の人々に對して私がかく要望するのは、私は、かれらの特長の發揮において社會の總體の者の生々發達をなるべく早く促進したいと考へるからである。社會の總體の者の生々發達は、眞理を實施し、正善を實現することから、始められなければならぬ。だから、知識階層の人々に右の團結を爲せといふことは、かれら



に眞理を實施し、正善を實現するための運動を爲せといふことである。この運動は、もちろん、民族問題乃至階級問題の解決のためにも爲されなければならないが、しかし、今日の時代においては、主として國家問題の解決に關して爲されなければならない。そのかくすることの最も効果的であることに關しては、既に前にこれをいうた。

知識階層の人々のこの運動は、たとひ國家問題の解決に關して爲されても、只無理由に國家の利益を高調するために爲されるものでなくして、却つて眞理を實施し、正善を實現することを高調するために爲されるものである。このことは、既に右に説述せられたことに依つて、おのづから明かである。國家問題の解決に際して、國家の利益を高調することは、もちろん、當然である。けだし、國家の利益の増進は、その國家の存する社會の總體の者の生々發達に最も多く寄與するからである。のみならず、一の國家に所屬するその構成員その他の人々が、その國家の利益を高調することは、亦、もちろん、當然である。けだし、人々は、社會の總體の者の生々發

達に寄與するに當つては、近きより遠きへ及すべきであるからである。けれども、それにも拘らず、右に私が、國家問題の解決に關して、眞理の實施乃至正善の實現の高調せられるべきことをいひ、只無理由に國家の利益を高調するべきでないといつたのは——誤解を避けるために補説するが——そのかくすることが、啻に一般に社會の總體の者の生々發達を最もよく促進するに止らず、かねて國家の利益の追求に最もよく適合するからである。もし人々が、只無理由に國家の利益を追求すれば、それは、結局において、啻に社會の總體の者の生々發達のみでなく、當該國家の利益をさへも阻害する。その利益が小利乃至自利に止る場合には、殊にさうである。眞理を實施し、正善を實現して、國家の利益を阻害し、社會の總體の者の生々發達の促進せられないことに至つては、もとより、想定せられ得ない。

だから、知識階層の人々は、須く知識人たる眞面目を發揮し、國家問題の解決に當つても、眞理を實施し、正善を實現するために、團結し且運動せよ。

『正しく知るとは、體系的に知るといふことである』



## あとがき

知識階層への理論は、以上で終る。

私の右に述べたところは、専ら人々の行爲の指導に直接の關係を有たない純正學的認識であり、決してそれに直接の關係を有つ運用學的認識ではない。そこで、私は、それは或は實踐に興味を有つ多くの人々を失望せしめやしないかと懸念するので、ここに少しくそれを實踐へ關聯せしめて考へて見ようと思ふ。けれど、右に述べたところは、たとひそれ自身實踐に係らない純理ではあるとしても、しかし、すべて純理は實踐の基礎と爲り得るものであるから、實踐へ關聯せしめられ得るものでなければならぬからである。

知識階層に關する私の右の理論は、餘りに個別具體的事實に立脚しない一般抽象的な論議であるから、人々は、或は、その論議に不服がなくとも、それが實際において妥當し得るかに關して、多大の疑惑を有つかも知れない。けれども、私は、右

の理論が一般抽象的に運ばれる以外に、他の方法があり得ないことと思ふ。そこで私は、それを體系的に且根本的に爲すことにおいて徹底しようと思つたのである。一般抽象的理論でも、それが苟くも正當である限りは、實際的に個別具體的事實に關して妥當しなければならぬ。

さて、右述の認識をもつて、實際に臨むに、實際の事實は、まさに、その眞理性を保證してゐるかに見える。たとへば、世界のあらゆる社會において、知識階層が尊重せられ、知識人が重大な役割を營み、各種の團結において指導的地位を保ちつつあることや、又たとへば、民族問題乃至階級問題よりも、國家問題が重大化し、民族的糾合を高唱し、乃至は階級打破を策謀する運動さへも、その實は國家的範圍の擴大の企圖に終りつつあることや、即ちこれを示す。

但し、實際上、二三の社會を除いては、今日のこの非常時において、知識階層の人々が、團結を爲しても、未だ活潑な運動を起すに至つてゐないことは、一見、怪訝に値する。日本においても、知識階層の人々の活動は、未だ決して目覺しいとは



いはれ得ない。そこで、私は、以下、日本の社會について、この怪訝に値する事實の原因について、一言する必要を思ふ。

日本が、今日、前古未曾有の大時局に際會してゐるに拘らず、その知識階層の人の間に、この稀有の大時期に相應しい活潑な運動が未だ起されてゐないのは、何に由來するか？ 日本の人々が、團結力に乏しく、愛國心が稀薄であることに、それが由來するか？ 曰く、否。反對に、かれらの團結力の強く、愛國心の旺盛であることは、歴史的に見て顯著な事實であり、まさに自明に屬するから、はじめよりこれを疑はなくてもよい。それなら、その原因は、果して那邊にあるか？

或は目下の戦時下にあつて監察が強化せられてゐるために、人々が割合に自發的に行動し得ないことや、もしくは戦争が幸ひに勝利を續けてゐるために、人々が割合に緊張を缺いてゐることなどを、その原因であるといふ人もあらう。これには、確かに首肯せられるべき點も存するが、しかし、事態の重大であるといふことの前

には、監察の強化も、戦争の勝利も、もちろん、知識階層の人々の運動を長く阻止し得るべき筈がない。

私が思ふには、日本において、この大時局・大時期に相應しい知識階層の人々の大運動の起らないのは、一に全く、かれらが、一方においては今日の戦争の意義を充分に知得せず、日本の有つ使命について深く考へようとしなないこと、及び他方においてはかれらの屬する階層を没落する階層であると思ひ込み、その無力であることを盲信してゐることに由來する。

元來、日本に今日知識階層の人々の活潑な運動が起るべくして、未だ起つてゐないといふことは、そこでは、歴史的必然性が未だこの運動を招來する機に到達してゐないが、しかし、やがてその機が歴史的に必然に熟することの豫測を言表する。社會の變遷に歴史的必然性が存し、従つていかなる社會上の事件も、この必然性を逸脱して生起し得ないから、日本に今日知識階層の人々の活潑な運動が存しないのは、歴史的必然性がさうさせてゐるのであり、そしてこの點に關しては、もとより



疑ひがあり得ない。しかもそれにも拘らず、そのやがて起ることをいふのは、それを起すに足る主要事情がそれを阻止する他の事情に早晚優越して強力と爲ることが豫測せられるに出でるものに外ならない。

知識階層の人々の運動といはず、すべて社會上の事件の起るのは、社會の事情に依存する。このことは、まさしく自明である。

社會の事情は、これを客觀的事情と主觀的事情とに分つことができる。客觀的事情とは、社會に存する社會意識以外の事情、切言すれば、固有の意義における社會事情をいひ、これに對して主觀的事情とは、社會意識上の事情、切言すれば、社會的意識形態の事情をいふ。客觀的事情は、これを直接事情と間接事情との二に分けて考へ得る。前者は、行爲主體及び行爲客體に存する事情であり、これに對して、後者は、その以外の事情、切言すれば、行爲主體及び行爲客體を繞る周圍の事情である。一般的にいへば、客觀的事情は、たとひ一時的には抑へられることがあつても、究極においては、必ず主觀的事情に勝つ。けだし、社會意識をもつて、社會意

識以外の事情の變遷を抑へ得ないのみでなく、その真相をも糊塗し得ないが、社會意識以外の事情は、容易に社會意識の變遷を促し、且その誤謬を是正することを得るからである。直接事情と間接事情との間では、前者は、一時的には後者を無視して妥當するが、しかし、持續的事件に關しては、必ず後者に依つて左右せられる。けだし、社會上の事件は、それがもし行爲主體及び行爲客體の存在を要件とするものであるなら、必ず先づこれらの者に存する事情に依つて影響せられるが、しかし、これらの者は、これらの者を繞りそしてこれらの者とは殆んど比較を絶して巨大な周圍の事情に依つて、影響せられないことを得ないからである。

日本に、今日、知識階層の人々の活潑な運動の未だ起らないのは、右にいはゆる主觀的事情が客觀的事情を抑へてゐるからである。私が右に『日本において、この大時局・大時期に相應しい知識階層の人々の運動の起らないのは、一に全く、かれらが、一方においては今日の戦争の意義を充分に知得せず、日本の有つ使命について深く考へようとしないうこと、及び他方においてはかれらの屬する階層を没落する



階層であると思ひ込み、その無力であることを盲信してゐることに由来する』といつたのは、これを意義する。けれども、日本に知識階層の人々の運動が起るかどうかを決する主要事情が、かくの如き主觀的事情に存しないで、客觀的事情に存することは、もとよりいふまでもない。しかも、この客觀的事情についてこれをいへば、日本が今日支那事變を繞つて大時局・大時期に際會してゐるといふ間接事情も、又日本の人々が團結力が強く、愛國心が旺盛であるといふ直接事情も、共に知識階層の人々の大運動を誘致するだけの素因と爲るに充分である。従つて、これらの客觀的事情が遂に右の主觀的事情に勝つて、右の大運動の起ることは、けだし、阻止せられ得ないであらう。

もちろん、今日のところは、右の大運動の起ることを阻止する原因は、尙客觀的事情の中に存する。例へば、既に右に述べたやうに、今日、戦時下にあつて監察が強化せられ、人々が自發的に行動し得ないことや、又戦争に勝利してゐるために、人々が緊張を缺いてゐることなどは、即ちそれである。實に現情に止つてこれをい

へば、日本において、××の國民再組織の企圖が遂に流産し、又國民精神總動員の運動も多くの効果を擧げ得ないことなどは、日本の人々の團結心が強く、愛國心の旺盛なことは、すべて過去の事實であつて今日のそれでないとの論結をすら、一應、導き出さしめ得ないとも限らない。

けれども、それにしても、支那事變は、日本にとつて—何人も認めるであらうやうに—歴史あつて以來の重大事件である。しかも、この重大事件の處理をいやがおうでも爲さなければならぬ今日の時局乃至時期は、あまりにも巨大である。

だから、この時局乃至時期が尙持續し、人々にその重大性が充分に意識せられるに至れば、知識階層の人々の活潑な運動の惹起せられることは、殆んど不可避的である。況んや、日本の人々の團結心乃至愛國心が、假りに昔時のやうに強盛でないと前提しても、日本の國柄は、今日も往時と同様であり、そこには、君民一體の意識が支配し、國家問題と民族問題とが合致し、階級問題が存しても、これは民族問題殊に國家問題の前に消え易く、しかも、一旦緩急あれば、義勇公に奉ずる念慮が



澎湃として動き、これが右の知識人の大運動を支援して止まないにおいてをや。

日本に、知識階層の活潑な運動の起ることは、かくて、早晚、必然である。これが、亦、この大時局の適正な解決のために望ましいことは、もとより、論を俟たない。即ち、日本において、今日、知識階層の人々の運動の起ることは、必然であり且望ましい。その起ることは、もとより當然であるといはれてよい。

日本に、今日、知識階層の人々の大運動の起ることが當然であるとすれば、今日の急務とするところの一は、この大運動をなるべく早く誘致することに存しなければならぬ。この誘致が、當局の人々に依つて爲されるのがよいか、在野の人々に依つて爲されるのがよいかに關しては、今はここで論及しないが、しかし、そのいづれの場合においても、重要なことは、その方法が知識階層の人々に働きかけるに適切であるといふことである。しかも、この適切の方法が、かれらに正當な時局意識を喚起し、かれらの重大な地位を覺知せしめることを中心としなければならぬ。

ことは、亦、もとよりいふまでもない。

知識階層の人々が、今日、尙、今回の支那事變の意義を充分に知得せず、日本の有つ使命について深く考へないこと、及びかれらが、かれらの階層を没落する階層であると思ひ込み、その無力であることを盲信してゐることは、前にこれをいうた。そこで、今日、人々のかれらに働きかける方法は、おのづから、次ぎの二を根幹としなければならぬ。その一は、積極的に、かれらに支那事變の意義を充分に理解し、日本の有つ使命について深く省察して貰ふために努力することであり、そしてその二は、かれらに、かれらの屬する階層が決して没落する階層でなく、かれらが決して無力でないことを、確信して貰ふために努力するといふことである。私は、かう思ふ者であるから、既に前に、第一の方法に多少でも役立たしめようために『日本と新國際主義』を著したが、今は、又第二の方法に幾分の寄與を爲したいために、本書を公けにすることにした。私は、もちろん、これらの著書を出しても、只單に知識階層の人々の清鑑を仰ぐことだけしか爲し得ないが、もしかうしたことが



機縁と爲つて、人々の知識階層に働きかけることが、組織化するやうになつたら、それは、喜しく思ふ。

知識階層の人々の、決して無力でなくして、却つて有力であること、かれらの階層の、没落するどころか、却つて將來ますます強盛を加へることは、既にこの書において十分に究明せられたことと思ふから、今はそれ以上蛇足を加へない。只私が、ここに最後に、本書の「まへがき」に述べたところに照應して、今一度回顧し、且一言附加しておきたいことは、新國際主義の今日の時局の解決に對する意義に關してである。

「新國際主義は、眞國際主義であり、そして又、不動の眞理である」。

私は本書の「まへがき」において『日本の國家が、否世界の國家がこれに準據して行動することが、この大時局において、特に重要である』といつた。實にこの主義こそは、只單に日本だけに妥當するものではなく、世界に妥當する大眞理であり、

只單に支那事變の解決に役立つだけでなく、今日及び將來のあらゆる國際的調整に役立つ大原理である。私は、もし日本の知識階層の人々がこの主義を高調して結束して立つなら、かれらは、啻に日本の人々のみでなく、世界の人々の心をも掌握し得るに至るであらうと思ふ。けだし、知識人は、國境性のない理論を喜ぶが、新國際主義の理論は、恰かもそれであるからである。

「日本は、今回の事變において、聖戰を戦ひ、そしてその必然の歸結として、事變の結末に關して、新國際主義に合致する處理を意圖してゐる。日本は、今、學問的に新たにこの主義を確立し、そしてこの確立せられた主義に従つて支那事變を解決しようとしてゐるのではないが、しかし、日本が聖戰を戦ひつつある必然の歸結として、實質上、この主義に合致する意圖を有つに至つてゐる」。

「日本が、巧まずして、おのづから聖戰を戦ひ、且期せずして、おのづから新國際主義に遵據する意圖を有つに至つてゐることは、一見、あまりにも不可思議であるが、しかし、それは、畢竟するに、日本の國柄乃至肇國の本義の致すところである」。



新國際主義は、今日、日本においてのみでなく、無意識的乃至假託的には、世界の主要諸國においても實施せられてゐる。このことも、既に本書の「まへがき」においてこれをいうた。けれども、新國際主義の、たとひ無意識的ではあるが、しかし假託的でなく眞實に、實施せられてゐるのは、實に日本においてである。日本人々は、由來、團結心が強く、愛國心が旺盛である。すべて團結心乃至愛國心の強い人々には、往々にして國境性の強い理論が喜ばれるものであるが、新國際主義の如き國境性のない、そして何國に採用せられても有益な理論が、日本において眞實に實施せられてゐることは、まことに日本の肇國の本義の偉大であることに起因するといふの外がない。

新國際主義の高唱は、かくて、(イ)國境性のない理論に基づく不動の眞理の強調であるから、世界の人々の知識人たる資格において有つ心を得る力があるのみでなく、(ロ)日本の肇國の本義の昂揚であるから、日本の人々の日本人たる資格において有つ心をも得る力があらう。しかも、新國際主義の主張は、決して市井に人々が

商議し、訓戒するやうな小觀念・小道德に屬しない。それは、世界に新秩序を與へ、永遠の平和の確立に資する大意圖を包藏するものである。

日本は、この稀有の大時期・振古未曾有の大時局に當つて、内は、萬邦無比の國柄に立脚して國內の人々の心を鞏め、外は、眞理を愛好する知識人に呼び懸けて世界の人々の心を收め、もつてその國是とする大理想の實現に努力しなければならぬ。しかも、そのためには、この大時局・大時期に相應しい大觀念・大道德を有たなければならぬが、新國際主義の理論は、かくの如き要件を具備してゐるやうに、私は思ふ。

新國際主義の今日の時局の解決に對する意義がかうであるなら、これに依つて知識階層の人々の奮起を促すことは、決して無謀の舉ではあるまい。

日本は、徳川時代の末期、明治維新に先だつて、知識階層の人々の大活躍を経験してゐる。今日の時局はその當時に比して、たとひその逼迫性において尙及ばないものがあらうが、しかし、その重大性においては遙かに勝つてゐる。ファッシズム



や、ナチズムの如き、必ずしも體系のない、しかも眞理として必ずしも許され得ない主張乃至理論さへ、尙國人乃至民族人としてのイタリア人乃至ドイツ人の心を得て、そしてイタリア乃至ドイツにおいては、知識階層の大運動を惹起し得た。體系はあるが、しかし、主要理論において誤つてゐるマルクシズムの主張に至つては、夙に階級人の心を收め得て、そして一時は全世界をさへ風靡するに至つた。もし新國際主義が眞理であるなら、それが世界において多くの共鳴者を見出し、又日本において知識階層の大運動を誘發し得ないことは、もとより考へられ得ない。(具體的事實に言及することは、本書の意圖するところではないが、しかし、實例を挙げれば、いはゆる近衛聲明は、新國際主義に立脚したものであり、そして汪政權は、この主義に呼應して樹立せられたものである。)

昭和十五年五月五日印刷  
昭和十五年五月十日發行

著者 田村徳治

發行者 株式会社 同文館  
東京市神田區神保町一丁目一番地

印刷者 株式会社 三省堂蒲田工場  
東京市蒲田區仲六郎一丁目五番地  
喜多見界

東京市小石川區小石川町壹番地  
株式會社 同文館出版部

電話 小石川(85)四七六三・四七六四・六三五一番  
振替口座東京一三五五番

—知識人—



法學博士 田村徳治著書

日本と新國際主義 四六判 四五〇頁 定價 壹圓八拾錢

わが一億同胞が、同一確信の上に立つて國論を統一し、鐵の團結を以つて堂々歩武を進めつゝ、ある秋、茲に思想界の至寶田村博士は、一意報國の念黙し難く、東亞協同體の實質を闡明し、敢然象牙の塔より街頭に立つた。外來の理論によらず、諸主義諸原理を統合し、拾星霜の久しき思索に立脚して皇國精神の眞髓を穿つた劃期的名著。

學問と世界の眞實 四六判 三〇〇頁 定價 壹圓八拾錢

本書は田村博士が折に觸れてものせる感想、批判、論文、隨筆等博士の心境を抒して一卷にまとめられた貴重なる新著である。本書は特に平易に短的に理解しやすく、一讀直ちに體系の整然と相俟つて著者のすぐれたる學究性を見出すであらう。學徒學生は勿論のこと汎く現代人の熟讀せられんことを望む。

京都市上京區廣小路寺町 立命館出版部版

高松高商教授 大泉行雄著

獨逸及び獨逸人の問題 四六判 二二四頁 定價 一・二〇 送・二〇

著者が滯獨中に得られた豊富な體驗とその鋭い觀察は、珠玉の如き美しい文體と相俟つて讀者をして獨逸及獨逸人の眞實の姿を理解せしめずにはおかない。

獨逸及獨逸人の眞實の姿を理理解せしめずにはおかない。  
獨逸の學校 獨逸の生活 獨逸の學校  
青少年少女指導 獨逸人と日本人 ウイーンの美と魅力  
古く新しい町 ミュンヘン 學都フライブルク

赤星水竹居著

虛無僧 四六判 一六四頁 定價 一・〇〇 送・二〇

著者は虚子門下の高足、ホトトギス同人。本書は收むるもの十五篇、輕妙脫俗、淡泊高雅、又あるものは人間心情の深淵を象徴し得て妙。

虚無僧 鉢木 蟲眼鏡  
春眼 樂屋のぞき 拜んで寝る妓  
おそめちゃん 雀のお宿 還曆  
鳳仙花 古い出納帳 玉とニ

東京同文館 振替口座 東京一三五番



文學士 清水幾太郎著

# 青年の世界

四六判 二四〇頁  
價一・二〇 送・一〇

青年は希望の時代であり、感激の時代である。著者は此處に豊富なる思想と透徹せる觀察力を持ち青年の心を心として青年を説き青年を語る。青年必讀の書である。

人間の権利

青年の光榮と苦惱

青年の自己意識

精神のバランス

青年の社會的運命

青年期の優越性

青年の課題

社會の本質

社會は人間を超越するか  
社會への愛と青年への愛  
青年の權利と救済  
青年如何に生くべきか

建長寺派管長 菅原時保著

# 本來の面目

四六判 一一五頁  
價〇・五〇 送・〇六

本來の面目は禪入門の第一歩であり極致である。我邦宗教界の第一人者が説く汲めども盡きぬ禪の妙味を本書により自から會得されよう。國民必讀の書として敢て薦む。

修養の第一義

道は遍きにあり

禪の修養

徹底禪

寒三味熱三味

生か死か

月は無心

心の置き所  
教の山理の海

人は有心

宮崎安右衛門著

# 捨て身の生活

四六判 一三六頁  
定價〇・五〇 送・〇六

本書は捨身せずにはゐたたまぬ必然さと其の必然さを起す熱情の對象とを明白にした。此對象を心に有つと否とは人間の全生活を幸福か不幸かにする重大なことである。本書に依れば生活に確乎たる信念と幸福なる生涯へのよき暗示を得ることを疑はない。

目次抜

「我」を離れた生き方

十字架の福音

生活宗教

貧者の生活

今日一日の捨身

立春大吉

伊福部隆彦著

# 青年の道

四六判 一四四頁  
定價〇・五〇 送・〇六

青年は如何に生きるべきか。それを青年の立場に立つて、青年の悩みとしてそこから生かゆべき道を強く示したのが本書である。あらゆるすべての青年がその心の友として本書一冊を書架に供へおくべきである。

目次抜

憂鬱と希望

未来への未知數

潔癖であればあるほど

敵と味方

勝利の悲哀

人生は長し

突進か内省か

人生の展開

青年の權利

青年の夢

高邁な精神

眞理の探求

交友論

人生意義に感ず

幸福の原理

青年の宗教心

信仰への道

東京 同文館 振替 口座 一三五一番

東京 同文館 振替 口座 一三五一番



奥平祥一著

# 尊徳の生活

四六判 二三八頁  
定價〇・七〇 送九

社會が日本的なものを求めつゝある現在、我々は再び尊徳翁の偉大さを認識せざるを得ぬ苦難の少年時代、道徳と經濟とを結び付けた壯年時代、凡ゆる障碍と闘ひ抜いて達した聖者の心。今更にその一生の變化多きに驚かされる。

その生い立ちに涙多き少年時代―粹萬倍の眞理を悟るまで―雄々しくも立上る青年  
二宮金次郎―己を捨て、人を恵む道を開く―野州の空に輝く報徳の太陽―天保の大飢饉―興國安民の大燈明臺二宮尊徳―報徳の大精神

文學士 樺 俊 雄 編

# 人間學序説

四六判 二九〇頁  
定價一・三〇 送一〇

現代の哲學は「上からの哲學」ではなくして「下からの哲學」である。この意味に於て人間學哲學は現代の要望に適ふのである。然らば人間學は如何なる意義を持ち、如何に發展すべきか、歴史學・社會學・教育學・倫理學・神學等が人間學の立場から如何に再認識されるべきか又如何なる關係にあるか、キリスト教・佛教に對して人間學は如何なる關係にあるべきか等を闡明したものが本書である。思想の混亂を招きたる現代、我々はこの混亂を克服せんが爲めに人間觀そのものの統一を求めねばならぬ。人間學が現代に求められる所以である

東 京 同 文 館 振 東 京 一 三 五 番 座

葛西千秋著 書目

# 日本教學論

菊 判 クロース装 函入  
定價 貳 圓 送・二四

日本教學とは何か。留學數年の經驗を持つ著者が西洋流の教學の弊を明かにし、日本教學の根本は斯くあるべしと明示しものが本書である。

大和の國 國家と學 我國の教學に就て 教學不二  
今の教學の弊 大和の哲學 我國の常識に就て 國體明徴

# 經濟學の新概念

菊 判 クロース装 上製  
定價 壹圓八拾錢 送・一〇

前段、學問の立直し

後段、我國の經濟學に就て

學問とは何ぞ  
西洋の學問  
我國古來の學問  
今の學問の弊  
今の學問の弊は何處より來るか  
結論(理學と道學)

經濟學の意義―東洋流と西洋流  
我國に於ける「經濟」の意義  
西洋思想の批判  
經濟學とは何か  
アウフヘーベンといふ語に就て  
自由と統制

東 京 同 文 館 振 東 京 一 三 五 番 座



文學士 佐藤慶二著

# 哲學新講

四六判 三二〇頁  
價一・六〇 送・一〇

西洋哲學は勿論、日本、印度、支那の哲學をも概観し、吾々現代人の人生觀乃至世界觀の樹立に志した、平易明快な無二の哲學入門書である。  
○哲學的精神(人生・世界觀・宗教・藝術・社會・歴史) ○西洋哲學の發展 ○印度哲學の發展 ○支那哲學の發展 ○日本哲學の發展 ○現代哲學の發展 ○科學の問題 ○世界觀の問題 ○實踐の問題 ○形而上學の問題(知と行・社會歴史・經濟・法律・宗教・國家の問題)

文學士 寺門照彦著

# 最近心理學原論

菊判 三二〇頁  
價二・五〇 送・一四

心理學の危機が叫ばれる時、著者は全く新らしき見地から、心理學に直接間接に關心を持たれる世の讀者に、本書が好き手引きとなり、明日への發足ともなれかしおこくる。  
○科學としての心理學の位置と役割 ○行動とその場(心理學の課題) ○環境の場(問題とその正しい解決・視覚體制とその法則・圖形と素地、恆常・三次元空間と運動) ○活動(反射、自己、實現運動・適應、構へ、情緒、意志) 記憶(痕跡理論の基礎づけ・理論と實驗) ○學習の記憶機能 ○社會と人

東京同文館 振替口座 東京一三番五

日本大學教授 文學博士 松原寛著書

# 哲學概論

四六判 三四〇頁  
價一・六〇 送・一四

人生とは何か、世界とは何か、と云ふ重大問題に答へることが哲學の究極の任務である。人生觀の樹立、世界觀の確立、之が哲學の最後使命である。本書は大衆をして生活上に哲學を實踐せしむることを期し高遠なる哲理を平明且歴史的に體驗づけて書かれてゐる。

# 西洋哲學物語

四六判 一二〇頁  
價〇・九〇 送・一〇

哲學概論は哲學上の言葉に對する理解を致へんとする横の研究であり、哲學史は哲學發展の推移を示す縦の攻究である。本書はさかく無味乾燥な哲學史を平易に面白く讀まらるべく書かれた定評ある書。

# ヘーゲル哲學物語

四六判 二四〇頁  
價〇・六〇 送・一〇

著者は云ふ。ク次に来るべき日本思想は衣を新たにしたるヘーゲル哲學である。本書はヘーゲル入門書とし好評。

# ヘーゲルと歴史哲學

菊判 四二〇頁  
價二・八〇 送・一四

著者はヘーゲルに沈潜すること既に十数年。本書はドイツ古典哲學以來の歴史哲學展開の跡を尋ねてその最も完成せる姿を備へる。

東京同文館 振替口座 東京一三番五



★ 萃拔著名思想・會社 ★

經濟學博士  
井藤半彌著

社會思想と近代生活

二四六判  
二二五頁  
送價・七〇

橫濱專門教授  
早瀬利雄著

現代社會學批判

四六六判  
三八七頁  
送價二・〇〇

文學博士  
圓谷弘著

集團社會學原理

菊二七〇判  
送價二・〇〇

慶應大學教授  
加田哲二著

國民主義と國際主義

四六六判  
三二六頁  
送價一・五〇

文學士  
樺俊雄著

人間學序說

四六六判  
二九〇頁  
送價一・二〇

東京同文館 振替口座 東京一三五番



終



¥.60